

和歌・歌謠索引

あ

あかゝらば見るべきものをかりがねのいづこばかりに鳴きて行
くらむ 夕26

赤駒の足掻速ければ雲居にも隠り往かむぞ袖巻け吾妹 明39④

あかざりし君が匂ひの恋しさに梅の花をぞ今朝は折りつる 手

35

あかざりし袖のなかにや入りにけむ我が魂のなき心地する 末

1 ③・関8①・菜下42・霧23・浮10

あかずして別るゝ涙滝にそふ水増るとやしたは見ゆらむ 関5

②

あか玉の光はありと人はいへどきみがよそひしたふとくありけ

り 桐5

あかつきの露は枕におきけるを草葉の上となるに思ひけむ 御

12

暁のなからましかば白露のおきてわびしき別れせましや 賢11

①・桜4

あかでこそ思はむ中は離れなめそをだに後の忘れ形見に 菜下

17

あかときのかはたれ時に鳥陰をこぎにし船のたづき知らずも

初19

あが仏顔くらべせよ極楽のおもて起しは我のみぞせむ 賢48

秋風にあふ頼みこそ悲しけれ我が身むなしくなりぬと思へば

明15

秋風に今か今かと紐解きてうち待ち居るに月かたぶきぬ 明47

⑧

秋風に声をほにあげてくる船は天のと渡る雁にぞ有りける 須

49

秋風になびく草葉の露よりも消えにし人を何にたとへむ 桐25

①・46

秋風の関吹き越ゆるたびごとに声うちそふる須磨の浦波 須45

①

秋風の露の宿りに君をおきて塵を出でぬることぞ悲しき 賢40

①

秋風の吹くにつけても訪はぬかな萩の葉ならば音はしてまし

末3・賢50・手19

秋風のふけばさすがに怪しきはよのことわりと思ふものから

柏51

秋風の身に寒ければつれもなき人をぞ頼むくるゝ夜ごとに 桐

26④

秋風の四方の山よりおのがじゝふくにちりぬる紅葉悲しな 帯

9②・賢23②

秋風は涼しくなりぬ馬並めていざ野に行かな萩の花見に 野2

秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

簗3①

秋霧にしとゞにぬれてよぶこ鳥さはの山べに鳴きわたるなり

夕41③

秋霧の立ちまふ嶺の山ぐちはかねてぞしるし移ろはむとて 松

20 ①

秋毎にかりつる稲はつみつれど老いにける身ぞ置き所なき 明

16

秋毎につらを離れぬ雁がねは春帰るとも変らざらなむ 横 16 ②

秋といへばよそにぞ聞きしあだ人の我をふるせる名にこそ有り

けれ 帚 4 ①・真 21・葉上 58 ②

秋なれば山とよむまで鳴く鹿にわれ劣らめやひとりぬる夜は

霧 56

秋になる言の葉だにも変らずは我も交せる枝となりなむ 桐 52

②

秋の色は千種ながらにさやけきを誰か小倉の山といふらむ 霧

59 ④

秋の田の刈穂の庵の匂ふまでさける秋萩見れど飽かぬかも 匂

10 ③

秋の田の穂向きの寄れる片よりにわれは物思ふつれなきものを

胡 27

秋の露は移^{うつし}にありけり水鳥の青葉の山の色づく見れば 葉上 58

①・59 ②・夢 3 ②

秋の野にかりぞ暮れぬる女郎花今宵ばかりの宿もかさなむ 霧

30・手 10 ②

秋の野に笹分けし朝の袖よりもあはでこし夜ぞひち勝りける

末 27

秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花も一時 桐

57・賢 38・総 32・宿 7 ②

秋の野に人まつ虫の声すなり我かと行きていざとぶらはむ 手

14

秋の野に行きて見るべき花のいろを誰さかしらに折りてきつら

む 若 13 ②・関 10 ②・行 20 ②

秋の野の草の袂か花すゝきはほに出でゝ招く袖と見ゆらむ 宿 61

秋の山紅葉を幣とたむくればすむわれさへぞ花心地する 賢 26

②

秋の夜に雨と聞こえて降りつるは風に乱るゝ紅葉なりけり 帚

53

秋の夜にかりかもなきて渡るなり我が思ふ人の言つてやせし

幻 24 ②

秋のよのあやしきほどのたそがれに萩吹く風の音ぞ身にしむ

薄 26 ①

秋の夜の数をかせむ鴨の羽の今は乙^わ節のかたはにはせむ 帚

8 ③

秋の夜の草の閉しの佗しきは明くれと明けぬものにぞ有りける

若 54 ②

秋の夜の千夜を一夜になずらへて八千夜し寝ばや飽く時のあら

む 葉下 16 ②

秋の夜の千夜を一夜になせりともことば残りて鳥や鳴きなむ

夕 45 ②・葉下 16 ①

秋の夜の月かも君は雲隠れしばしも見ねばこころ恋しき 桐

65・橋 25 ②

秋の夜の月の光しあかければくらぶの山もこえぬべらなり 若

40 ③・霧59①

秋の夜のなもあるものをはかなくもあけしを西に月の行くらむ

須57

秋の夜は人を静めてつれづれとかきなす琴の音にぞなきぬる

推12

秋萩にうらびれをれば足引の山したとよみ鹿の鳴くらむ 明57

⑤

秋は来ぬ紅葉は宿にふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし 帚

56・宿58

秋萩のさくにしもなど鹿のなく移ろふ花はおのが妻かも 句10

⑤

秋萩の下葉色づく今よりや独あるひとのいねがてにする 葉上

59 ③

秋萩の下葉につけてめに近くよそなるひとの心をぞみる 葉上

33 ①

秋萩のふるえに咲ける花みればもとの心は忘れざりけり 松36

①

秋萩をしがらみふせて鳴く鹿のめには見えすて音のさやけき

句10 ④

秋はなほ夕まぐれこそたゞならね萩の上風萩の下露 少5・幻

35

秋吹くはいかなる色の風なれば身にしむばかりあはれなるらむ

葵36 ⑤・御8 ①・宿55 ②

秋までの命もしらず春の野に萩の古枝をやくときくかな 須34

①・朝11

秋も猶とこなつかしき花の色をうたがひをける露ぞはかなき

常14

秋山をゆめ人懸くな忘れにしそのもみぢ葉の思ほゆらくに 玉

23

秋をおきて時こそありけれ菊の花うつろふからに色のまされば

帚52・藤34・宿1・63

明くるまで起きゐる菊の白露はかりの世を思ふ涙なるべし 幻

37 ①

あけ暮し守るたのみをからせつゝ袂そほつと身とぞなりぬる

鈴16

明け暮れの空にぞわれはまよひぬる思ふ心のゆかぬまにく

葉上36・葉下40 ①・総35

明けたてば蟬のをりはへ鳴き暮らし夜は螢のもえこそ渡れ 浮

52

あけてだに何にかはせむ水の江の浦島の子を思ひ遣りつゝ 霧

67 ③・橘24

あけぬとて今はの心つくからになどいひ知らぬ思ひそふらん

蘭17 ①

明けぬ夜の心地ながらにやみにしを朝倉といひし声はききや

須37 ②・推18 ①

総角や とうとう 尋ばかりや とうとう 離りて寝たれども

転びあひけり とうとう か寄りあひけり とうとう 総

5・17・21

阿胡^{あこ}の浦に船乗りすらむ娘^{こども}子らが赤裳の裾に潮満つらむか 真

35 ②

あさがほはつねなき花の色なれやあくるまさきてうつろひにけ
り 宿 6

浅香山影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものかは 若 37

①・椎 38

朝鴉^{あさかり}早くな鳴きそわがせこが朝明^{あさみ}のすがた見れば悲しも 夕

16 ②

浅からぬ契むすべる心ば、手向のかみぞしるべかりける 絵 1

②・菜上 74 ①

浅くこそ人は見るらめ関川のたゆる心はあらじとぞ思ふ 宿 33

朝倉や 木の丸殿に 我が居れば 我が居れば 名宣^{のり}りをしつ

つ 行くは誰 東 35

朝ごとにみし都路の絶えぬればことあやまりにとふ人もなし

梅 12・藤 3

浅茅原たままく葛のうら風のうら悲しかる秋は来にけり 玉 6

浅茅原主なき宿のさくら花心やすくやかせに散るらむ 早 33 ②

浅茅生の小篠が原におく露ぞ世のうきつまと思ひみだるる 横

13

浅茅生のをのゝ篠原忍ぶとも人知るらめやいふ人なしに 霧 57

②

あさちふの小野の篠原忍ぶれどあまりてなどか人の恋しき 霧

57 ③

朝霧のおくての山田かりそめに憂き世の中を思ひぬるかな 御

9

朝つゆのけやすきわが身老いぬとも又こまがへり君をし待たむ

玉 30 ①

朝な朝なわが見る柳鶯の来居て鳴くべき森に早なれ 蓬 23

朝ぼらけ萩の上葉の露みればやゝはだ寒し秋の初風 桐 26 ③

朝ぼらけ蛸のこゑ聞こゆなりこや明けぐれと人のいふらむ 野

13

朝まだきおきてぞ見つる梅の花夜のまの風の後めたさに 若

32・野 8 ②・宿 8

浅みこそ袖はひづらめ涙川身さへ流ると聞かばたのまむ 葵 10

②・13 ①・玉 28 ①

浅緑いとよりかけて白露を玉にもぬける春の柳か 柏 44 ②

浅緑野べの霞はつゝめどもこぼれて匂ふはなざくらかな 初

25・野 10 ①・幻 13 ②

朝もよひ紀の川上をけさ見れば金の御嶽に雪降りにけり 夕 30

②

朝もよひ紀の川ゆすり行く水のいづさやむさやいるさやむさや

葵 24 ③

あさりしてかひ有りけりと思ふ身を恨みてふると人やみるらむ

須 39 ④

あさりするよさのあま人誇るらむ浦風ぬるく霞わたれり 明 17

朝井堤^{あさいで}に来鳴くかは鳥汝^かだにも君に恋ふれや時終へず鳴く 菜

上 77 ②

葦垣真垣 真垣かきわけ てふ越すと 負ひ越すと 誰 てふ

越すと 誰か 誰か この事を 親に まうよこし申しし
 とどろける この家 この家の 弟嫁 親に まうよこしけ
 らしも 天地の 神も 神も 證したべ 我はまうよこし申
 さず 菅の根の すがな すがなきことを 我は聞く 我は
 聞くかな 藤11

あし鴨のすだく池水増るともあせきの方に我こひめやは 横8
 あしかれと思はぬ山の峯にだにおふなる物を人の歎きは 桐

1・真22②・藤20・総71

あしき手をなほよきさまにみなせ川底のみくづの数ならずとも

常31①

あしたづのよはひしあらば君が代の千歳の数も数へととりてむ

菜上24②

芦根はふうきねにすだく鴨のこは親にまさると聞くはたのもし

真38②

芦ねはふうきは上こそつれなけれ下はえならず思ふ心を 帚26

②・57・梅19①

葦屋の 菟原処女の 八年児の 片生の時ゆ 小放髪に 髪た
 くまでに 並び居る 家にも見えず 虚木綿の 隠りてをれ
 ば 見てしかと 悵憤む時の 垣ほなす 人の眺ふ時 血沼
 壮士 菟原壮士の 盧屋焼く すすし競ひ 相結婚ひ しけ
 る時は 焼太刀の 手柄押しねり 白檀弓 収取り負ひて
 水に入り 火にも入らむと 立ち向ひ 競ひし時に 吾妹子
 が 母に語らく 倭文手纏 賤しきわがゆゑ 丈夫の 争ふ
 見れば 生けりとも 逢ふべくあれや ししくしろ 黄泉に

待たむと 隠沼の 下延へ置きて うち歎き 妹が去ぬれば
 血沼壮士 その夜夢に見 取り続き 追ひ行きければ 後れ
 たる 菟原壮士 天仰ぎ 叫びおらび 足すなりし 牙喫み建
 びて 如己男に 負けてはあらじと 懸佩の 小剣取り佩き
 ところ葛 尋め行きければ 親族どち い行き集ひ 永き代
 に 標にせむと 遠き代に 語り継がむと 処女墓 中に造
 り置き 壮士墓 此方彼方に 造り置ける 故縁聞きて 知
 らねども 新喪の如も 哭泣きつるかも 帚24

菜上11

足引きの山桜戸をまれにあけてまだ見ぬ花の色を見るかな 若

23②

あしひきの山田のそはづ己さへ我をほしといふうればしき事

菜下1

あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながくし夜をひとりかも寝

む 霧68②・総34①

あしひきの山行きしかば山人のわれにえしめし山づとぞこれ

賢45・蓬17

葦駁の や 森の 森の下なる 若駒率て来 葦駁の 虎毛の
 駒(本) その駒ぞ や 我に 我に草乞ふ 草は取り飼はむ
 水は取り 草は取り飼はむや(末) 松43
 あしわかぬ浦にきよする白波のしらじな君は我はいふとも 若
 49①
 あすか川心の内に流るれば底のしがらみいつかよどまむ 幻7

①

明日香川しからみ渡し塞^{ふさ}かませば流るる水ものどにあらまし

柏38①・手4③

あすか川淵にもあらぬ我が宿もせに変わりゆくものにぞありける

少1①

あすか川我が身一つの淵瀬ゆへなべての世をもうらみつるかな

蓬4①・32・橋17①

飛鳥井に宿りはすべしや おけ 蔭もよし 御簾^{みすだ}も寒し

御萩^{みはぎ}もよし 帚54・須62

明日知らぬ我が身と思へど暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけ

れ 総65

あせにける今だにかかる滝つせの早くぞ人は見るべかりける

松2②

あだ人のをこつり棹の危さにうけ引くことのかたくもあるかな

霧34

あだ人もなきにはあらずありながら我が身にはまだ聞きぞ習は

ぬ 帚4②・玉43

新しき年とはいへどしかすがに我が身ふりぬる今日にぞありけ

る 葵64①

新らしき年のはじめにかくしこそ千年をかねて楽しきをつめ

初9③

新らしくあくる今年を百年の春のはじめと驚ぞ鳴く 葵63①

あたら夜^{あたら}の月と花とを同じくは心しれらむ人に見せばや 明

37・鈴8・紅7①・手17

あたら夜を妹とも寝なで取りがたき鮎^{あつ}取るく^くと岩の上^いにゐて

常1④

あぢきなく思ひこそやれつれく^くと一人やゐでの山吹の花 真

36⑥

あぢきなく花の便りにとはるれば我さへあだになりぬべらなり

幻3③

あぢきなし春とみるとかへるさに道やまどはん山の白雪 幻

43②

梓弓いそべの小松たがよにか万代かねてたねをまきけむ 柏34

梓弓いるさの山はあき霧のあたるごとにや色まさるらむ 花15

梓弓末の腹野^{はらの}に鳥狩^{とり}する君が弓弦^{ゆづ}の絶えむと思へや 夕42①

梓弓爪引く夜音^よの遠音^{とほ}にも君が御幸を聞かくし好しも 夕42②

梓弓春の山べをこえくれば道もさりあへず花ぞ散りける 関

3

梓弓ひきつのべなるなのりそのたれ憂きものと知らせそめけむ

薄32②

梓弓真弓槻弓としを経て我がせしがごとうるはしみせよ 桐44

①

東路の草葉をわけむひとよりも後るゝ袖ぞまづは露けき 葵37

東路の名こそこの関のよぶこ鳥なにゝつくべきわが身なるらむ

鈴10

東路の道の果てなる常陸帯のかごとばかりも逢ひ見てしがな

桐44③・賀33②・玉33・蘭6・竹34

あづまにて養はれたる人の子は舌だみてこそものは言ひけれ

玉13・常26・橋20・東2

東屋のまやのあまりの雨そゝきあまりなるまでぬるゝ袖かな

東32②

東屋の 真屋のあまりの その 雨そそぎ 我立ち濡れぬ 殿

戸開かせ かすがひも 錠もあらはこそ その殿戸 我鎖さ

め おし開いて来ませ 我や人妻 賀26・蓬28・螢4①・東

32①・37①

あな恋し今も見てしが山がつのかきはにさける大和撫子 帯63

②・葵43・常16・霧4・手7

あな尊 今日尊とさや 昔も はれ 昔も かくやありけ

む や 今日の尊さ あはれ そこよしや 今日の尊さ 少

23・胡9・宿70

あはざりし時いかなりし物とてかただ今のまも見ねば恋しき

霧32①・宿40

あはざりし涙のもろく成り行くはよやつきぬらん時やきぬらん

賢32

栗田山こゆともこゆと思へども猶逢坂ははるけかりけり 関2

淡路にてあはと雲居に見し月の近き今宵は所がらかも 明19

①・松39

あはとみる道だにあるを春霞かすめる方の遥かなるかな 明19

②

沫雪は今日はな降りそ白妙の袖まきはさむ人もあらなくに 末

30

あはれけふ冬のはじめになりにけり羊の歩みことならぬかな

浮53②

あはれ ちはやぶる 賀茂の社の 姫小松 あはれ 姫小松

万代経とも 色は変 あはれ 色は変らじ 末35③・葉下12

②

あはれてふ事をあまたにやらじとや春に後れてひとりさくらむ

菜上42・竹17②

あはれともいふべき人は思ほえて身のいたづらになりぬべきか

な 賀5・澤6・葉下57

あはれともうしともいはじかげろふのあるかなきにけぬる世

なれば 蜻35①・36⑧

あはれともうしとも物を思ふ時などか涙のいとなかるらむ 空

6④・句3①

あはれ我が妻とも君を思ひてやあかすてのみやかへりみがちに

東37②

あはれわれ いつゝの宮の みやびとゝ その数ならぬ 身を

なして 思ひしことは かけまくも かしこけれ共 たのも

しき かげに二たび おくれたる ふたばの草を ふくかせ

の 荒きかたには あてじとて せばき袂を ふせぎつゝ

ちりも据じと みがきては 玉のひかりを 誰れかみむ と

おもふ心に おほけなく かみつ枝をば さしこえて はな

咲く春の みやびとゝ なりし時はゝ いかばかり しげき

影とか たのまれし 末の世までと おもひつゝ こゝの重

ねの そのなかに いつきすべしも ことてしも 誰ならな

くに をやまだを 人にまかせて われはたゞ 袂そほづに

身をなして ふたはる三春 すぐしつゝ その秋ふゆのあ
さぎりの 絶間にだにも と思ひしを みねのしら雲 よこ
さまに 立ち変りぬと みてしかば 身を限とは おもひに
き 命あらばと たのみしは 人におくるゝ ななりけり
思ふもしるし やまがはの みなしもなりし もろびとも
動かぬきしに 守りあげて 沈むみくづの はてくは か
き流されし かみなづき 薄きこほりに とちられて とま
れる方も なきわぶる なみだ沈みて かぞふれば ふゆも
三月に なりにけり 長きよなく しきたへの ふさず
休まず 明けくらし 思へどもなほ かなしきは やそうぢ
人も あたらよの 例なりとぞ さわぐなる 況てかすがの
すぎむらに 未だかれたる 枝はあらじ おほ原のべの つ
ばすみれ つみ犯しある ものならば 照日もみよと いふ
ことを 年のをはりに きよめずは わが身ぞ遂に くちぬ
べき 谷のうもれ木 はるくとも 椿ややみなむ 年のうち
に 春ふくかぜも 心あらば 袖のこほりを とけとふかな
む 桐48 ①・野14 ②

あはれをばなげのことばといひながら思はぬ人にかくる物かは
若47 ③

あひ思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼のしりへに額づくが如 夕31

① 逢ひにあひてもと思ふ頃のわが袖に宿る月さへぬるゝ顔なる

須14

逢ひ見しをうれしき事と思ひしはかへりて後のなげきなりけり

絵4

逢ひ見ての後の心にくらぶれば昔はものを思はざりけり 葵58
相見ては面隠さるるものからにつぎて見まくのほしき君かも

宿22

あひ見てはおもてふせにや思ふらんこそその関にをひよはゝき

ゝ 常28 ②

逢ひ見ては慰むやとぞ思ひしに名残しもこそ恋しかりけれ 若

55 ②・蓬25

あひみむと思ふ心は松浦なる鏡の神や空にしろらむ 玉15 ①

あひみるめ沖の小島にふけよりてあまうてみちぬよすがなみな

り 帚34 ②

阿武隈に霧立ち曇り明けぬとも君をばやらじまてばすべなし

帚20 ②

あふことの明けぬ夜ながら明けぬれば我こそ帰れ心やはゆく

須37 ①

逢ふことの片よせにする網の目にいはけなきまで恋ひかゝりぬ

る 霧43

逢ふことの 稀なるいろに おもひそめ わが身は常に あま

ぐもの 晴るゝ時なく 富士のねの 燃つゝとはに おもへ

ども あふことかたし なにしかも 人をうらみむ わたつ

みの 沖をふかめて おもひてし おもひは今は いたづら

になりぬべら也 ゆくみづの たゆる時なく かぐなはに

おもひ乱れて ふるゆきの けなばけぬべく おもへども

えぶの身なれば なほやまず 思ひは深し あしびきの や

ました水の 木がくれて たぎつ心を たれにかも あひ語

らはむ 色にいでば 人しりぬべみ すみぞめの 夕べにな
れば ひとり居て 哀れく と 歎きあまり せむ術なみに
庭にいでゝ たち休らへば しろたへの ころもの袖に お
くつゆの けなげぬべく おもへども なほ歎かれぬ は
るがすみ よそにも人に あはれとおもへば 帯20①・若57

・明7⑧

逢ふことはいとゞ雲居の 大空に立つ名の みしてやみぬばかりか

霧44④

逢ふ事はかたわれ月の 雲がくれおほろけにやは人の 恋しき 橋

25①

あふことは雲居遥かになる 神の音にきゝつゝ 恋ひわたるかな

夢6

逢ふことはこれや限りの 旅ならむ草の 枕も霜がれにけり 椎29

逢ふことはたなばたつめにひとしく 裁ち縫ふわざはあえずぞ

ありける 帯47

逢ふ事も頼むる事もあやまたば 世にふる事もあらじとぞ思ふ

明46③

逢ふことを阿漕の 島に曳網のたび重ならば人も知りなむ 賢62

逢ふことをいつかその 日と松の木の 苔のみだれて恋ふる此のこ

ろ 浮46

逢坂の関のあなたもまだみねば 東のこともしられざりけり 賢

18

あふ坂の関やなか／＼ 近けれどこえわびぬれば 歎きてぞふる

関7①

あふことは遠山どりの めもあはずあはずて 今夜あかしつるかな

総34③・48②

あふ坂の関の 清水に影みえていまや 引くらむ望月の 駒 菜上50

②

あふ坂の名をば頼みて こそかども隔つる 関のつらくもあるかな

帯89①

あふ時はますみの 鏡はなるればひゞきの 灘に波もとゞろに 玉

18②

逢ふと見し夢になかなかく さらされて名残恋しく 覚めぬなりけり

総15②

逢ふまでの 形見とてこそ留めけむ 涙に浮かぶ 藻屑なりけり 空

7・夕69①・明31③・行19

近江路をしるべなくとも 見てもしかな 関のこなたは わびしかりけり

椎9

近江にかありといふなる みくりくる人 苦しめのつくま 江の沼

玉32①

近江のや 鏡の山をたてたれば かねてぞみゆる 君が千年は 初5

②・7・浮29

天雲には ねうちつけて 飛ぶたづの たづたづしかも 君しまさねば

須65

天雲のよそにも 人の成り行くか さがすがにめには 見ゆるものから

藤21・菜上33②

天さかる 鄙にある我をうたかたも 紐解き放^きけて思ほすらめや

真31②

あまた度行き逢ふ坂の関水に今はかぎりの影ぞかなしき 御5

①

あまたには縫ひ重ねゝと唐衣思ふ心はちへにぞありける 初27

②

天の川浮木にのれる我なれやありしにもあらず世はなりにけり

賢36・松15②

天の川通ふ浮木にこと問はむ紅葉の橋はちるやちらすや 松15

①

天の川とはき渡りにあらねども君が舟出は年にこそまで 松46

①

天の川冬は氷にとぢたれや石間にたぎつ音だにもせぬ 朝29

あまのかる藻に住む虫の我からとねをこそなかも世をば恨みじ

夕39・蓬16・柏11・霧39・宿35③

あまの住む里のしるべにあらなくに恨みむとのみ人の言ふらむ

椎35

あまの住む底のみるめもはづかしくいそにおいたるわかめをぞ

つむ 若9①

天の戸をおし明け方の月みればうき人しもぞ恋しかりける 葵

48②・賢39

天の原あかねさし出る光にはいづれの沼がさえ残るべき 行9

天の原ふみとどろかしなる神も思ふなかをばさくるものかは

夕29・賢15①・明8

天の原わきて鳴くなる雁がねはふる郷たづね帰るなるべし 幻

39

あまびこの音信しとぞ今は思ふ我か人かと身をたどる世に 夕

41②

あま小舟帆かも張れると見るまでに鞆の浦廻に波立てり見ゆ

須70

あま小舟われに思ひをつけてしを波のよるくまつと思はん

明59

あみの浦に船乗りすらむをとめらが珠裳の裾に潮満つらむか

明32

天地の神し理なくはこそわが思ふ君に逢はず死にせめ 明6

天地のそこひのうらにわが如く君に恋ふらむ人はさねあらじ

玉39②

雨により田蓑の島を今日行けば名には隠れぬものにぞありける

濤19

天の下のがるゝひとの無ければやきてしぬれ衣ひる由もなき

霧18⑤

雨ふれば色さりやすき花桜薄き心を我が思はなくに 幻13③

雨ふれば笠取山のもみち葉は行きかふ人の袖さへぞてる 野11

①

雨やまぬ軒の玉水数しらず恋しきことのまさるころかな 真33

①

あやしくも厭ふにはゆる心かないかにしてかは思ひやむべき

常30②・早18②

あやしくもわれ濡れ衣きたかるな三笠の山を人にかられて 浮

4

あらかりし波の心はつられれどすごしによせし声ぞこひしき

賀32

あらざらむこの世のほかの思ひ出に今ひとたびのあふこともが

な 須17・総72

あらし吹く風はいかにと宮城野の小萩が上を人のとへかし 桐

35②

あら塩のみつの潮あひに焼くしほのからくも我は老いにけるか

な 明10

あら玉の年立ちかへるあしたより待たるものは驚のこゑ 末

37・初1・15⑥

あらたまの 年のはたちに たらざりし ときはの山の やま

さむみ 風もさはらぬ ふぢごろも ふた度たちし あさぎ

りに こゝろも空に まどひそめ みなしこ草に なりしよ

り 物思ふことの 葉をしげみ けぬべき露の よるはおき

て 夏はみぎはに もえわたる ほたるを袖に ひろひつゝ

ふゆは花かと 見えまがひ このもかのものに ふりつる

雪をたもとに あつめつゝ 文みていでし みちはなほ 身

の憂にのみ ありければ 愛もかしこも あしねはふ 下

のみにこそ しづみけれ 誰こゝのつ の さはみづに なくた

づの音を ひさかたの 雲のうへまで かくれなみ たかく

聞ゆる かひありて いひ流しけむ ひととはなほ かひも渚

に みつしほの 世には辛くて すみのえの 松はいたづら

老いぬれど みどりの衣 ぬぎすてむ 春はいつとも しら

なみの 浪路にいたく ゆきかよひ ゆも取敢へず なりに

ける 舟のわれをし きみしらは あはれいまだに しづめ

じと 天のつりなは 打ちはへて ひくとしきかは 物は思

はじ 橋40③

新玉の年ふり積もる山里にゆき離れぬる我が身なりけり 賢3

① ① あらたまの年行き還り春立たばまつわが屋戸に驚は鳴け 紅3

① ① あらばこそはじめも果ても思ほえめ今日にも逢はで消えにしも

のを 霧70①

霰ふるみ山の里のわびしきはきてたは易くとふ人ぞなき 末

12・総68①

ありありて後も逢はむと言のみを堅くいひつつ逢ふとは無しに

夕46

ありと見て頼むぞかたきうつせみの世をばなしとや思ひなして

む 蜻35④・36⑨

ありぬやと心見がてら逢ひ見ねば戯れにくきまでぞ恋しき 帚

44・賀28②・明36・朝22・梅17・霧74・総46・浮14

ありはてぬ命待つまのほどばかり憂きことしげく思はずもがな

松6・鈴2・御2・宿24

あるが上にまたぬきかくる唐衣み棹もいかゞつもりあふべき

帚26③

ある時のありのすさびに語らばで恋しきものと別れてぞ知る

桐23②

ある時はありのすさびに憎かりきなくてぞ人は恋しかりける

桐23①・鈴6

あると見て頼むぞ難きかげろふのいつともしらぬ身とはしるし

る 蜻35②

あるはなく無きは数そふ世の中にあはれいづれの日まで歎かむ

須18①・藤4

あるものと忘れつゝ猶なき人をいづらと問ふぞ悲しかりける

桐18

荒れにけり哀れいく世の宿なれや住みけむ人の音づれもせぬ

松27

あればありとなけしよそにみし人の秋風吹けばそれぞ恋しき

桐23③

青駒の足搔^{あがき}を早み雲居にそ妹があたりを過ぎて来にける 明39

②

青柳を 片糸によりて や おけや 鶯の おけや うぐひす

の ぬふといふ笠は おけや 梅の花笠や 胡11・菜上26①

い

いかでかと思ふ心のある時はおほめくさへぞうれしかりける

菜上35②

いかでかは尋ねきつらむ蓬生の人も通はぬわが宿のみち 桐

32・蓬27②

いかでなほ網代のひをにこととはむ何によりてか我をとほぬと

総53②

いかでなほありと知らせじ高砂の松の思はむこともはづかし

桐36①・霧16②・手3

いかで我つれなき人に身をかへて恋しき程を思ひ知らせむ 総

80①

いかで我人にもとはむ暁のあかぬ別れやなにゝ似たりと 須8

いかならむ巖の中に住まばかは世の憂き事の聞こえこざらむ

若3・須10①・12・澤11・宿60・東19

いかなりし時くれ竹のひと夜だにいたづらぶしを苦しといふら

む 帚81

いかなればあふみの海のかかりてふ人を見るめのたえて生ひね

ば 総51

いかなれや昔思ひしほどよりも今の間思ふ事のまさるは 霧32

②

如何にあらむ日の時にかも声知らむ人の膝の上わが枕かむ 若

51①

いかにかと思ふ心のある時は我が身をゝきて人ぞかなしき 菜

上35①

いかにしていかによからんをの山のうへより落つる音なしの流

行1③・霧40・62

いかにしてかく思ふてふことをだに人伝ならで君に語らむ 若

48・賀9・朝17②・菜上45・菜下3

いかにしてしばし忘れむ命にあらば逢ふ夜のありもこそすれ

若31④

いかさまにせん／＼とこそいはれけれ世のうき時のひとりごと
には 蜻 4 ①

いかにせむ御垣が原に摘む芹のねにのみなけどしる人のなき
菜上 79 ①

いかばかり恋てふ山の深ければ入りと入りぬる人惑ふらむ 胡

17・菜下 55

如何ばかり 良き業してか 天照るや 日霊女の神を 暫し留

めむ 暫し留めむ(本) いづこにか 駒を繋がむ 朝日子が

さすや岡辺の 玉笹の上に 玉笹の上に(末) 桐 55 ②・菜下 14

いきしなむ事の心になかなひなば二たび物は思はざらまし 竹 25

生きての世死にての後の後の世も羽を交せる鳥となりなむ 桐

52 ①

幾かへり咲きちる花をながめつゝもの思ひ暮らす春にあふらむ

藤 10

いくたびか夜にかへすらん唐衣返す／＼もうらみらるゝは 行

17 ①

いくばくの田を作ればか時鳥しでの田をさをあさな／＼よぶ

蜻 12 ①

幾世しもあらじものから若竹の生ひ添はりけむ春さへぞ憂き

胡 21 ①

幾世しもあらじわが身をなぞもかくあまのかるもに思ひ乱るる

柏 20・宿 12

池神の力士御かも白鷺の棹吻ひ持ちて飛びわたるらむ 胡 3 ②

池にすむ我が名ををしのとり返す物にもがなや人を恨みじ 賢

42 ②・菜上 16 ①

池はなほむかしながらの鏡にて影見し君がなきぞ悲しき 賢 24

①

池水の底にあらではねぬなはのくる人もなし待つひともし

帯 10 ②

生ける代に恋といふものを相見ねば恋の中にも我ぞ苦しき 須

43 ②

いざかくてをり明かしてむ冬の月春の花にもおとらざりけり

朝 25

いざここにわが世は経なむ菅原や伏見の里のあれまくもをし

総 16・早 10 ②

いざ桜我も散りなむ一盛りありなば人に憂きめえなむ 賢 37

①・句 2 ④

いさゝめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人にみえつゝ

桐 21・若 8

いざせこと小倉の山の家ゐして短き夏のををも恨みじ 若 40 ④

いさやまたかか思ひを知らぬかな逢ひても逢はで明くる物と

は 東 25 ③

いさやまだ恋に死ぬてふ事もなし我をや後の例にはせむ 藤 14

②

石川の 高麗人に 帯を取られて からき悔する かななる

いかなる帯ぞ 縹の帯の 中はたいれるか かやるか あや

るか 中はたいれたるか 賀 33 ①・花 14

伊勢のあまの朝な夕なにかつくとふあはびの貝の片思ひにして

帯 68 ①

伊勢のあまの朝な夕なにかづくてふみるめに人をあくよしもが

な 賀 15・賢 28・葉上 53

伊勢の海に釣するあまのうけなれや心ひとつを定めかねつる

葵 8・9

伊勢の海に年経て住みしあまなれどかかるみるめは潜かざりし

を 明 31 ①

伊勢の海の 清き渚に しほがひに なのりそや摘まん 貝や

拾はむや 玉や拾はむや 明 24・宿 64

伊勢の海の干尋の浜に拾ふとも今は何てふかひか有るべき 賢

16

伊勢の海の釣のうけなるさまなれど深き心は底に沈めり 竹 3

②

伊勢人は あやしき者をや 何と言へば 小舟に乗りてや 波

の上をこぐや 波のへ漕ぐや 須 40

いせ渡る川は袖より流るればとふにとはれぬ身は浮きぬめり

須 16 ②

磯の上に生ふる小松の名を惜しみ人に知らえず恋ひ渡るかも

明 40 ①

いそのかみふるの山里いかならん遠の里人かすみ隔てゝ 総 45

①

いたづらにすぐる月日はおもほえて花見てくらす春ぞすくなく

葉下 64

いたづらに立ちかへりにし白波のなごりの袖のひる時もし

賀 30・明 61

いたづらに行きては来ぬるもの故に見まくほしさにいざなはれ

つゝ 賀 24 ①・句 12

いたづらに世にふる物と高砂の松も我をや友と見るらむ 桐 36

④

いたるけやべにゝも似たる梅の花あこが顔にもつけたくぞある

常 34

いちじるき山口ならばこゝながら神の気色を見せよとぞ思ふ

松 20 ③

一二の目のみにあらず五六三四さへありける 双六の頭 常 23

いづ方に立ち隠れつゝ見よとてか思ひぐまなく人のなり行く

行 2・蘭 9・竹 15 ③

いづかたに立ち寄れとてか春霞思はずにのみ空に見ゆらん 帯

83 ②

いづかたにゆきかくれなむ世の中に身の有ればこそ人もつらけ

れ 賢 3 ③

何方の雲路ときかは尋ねましつら離れけむ雁の行くへを 幻 24

①

いつかわれ涙の絶えむ唐ころも君が心のつらき限りは 末 28

いづくとて尋ね来つらむ玉かつら我は昔のわれならなくに 玉

37 ①

いづくとも所定めぬ白雲のかゝらぬ山はあらじとぞ思ふ 浮 50

①

いづくにか今宵の月の曇るべき小倉の山も名をやかふらん 霧

59 ②

いつくにか身をばよせまし世の中に老をいとはぬ人しなれば

常 8

いつくにか宿りとりらむあさひこがさすや岡への玉笹の上 帯

59

いつくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にも惑ふべらなれ 柏

2 ①・橋 7・浮 50 ②

いつことも春の光はわかなくにまだみ吉野の山は雪ふる 幻 1

①・手 31

いつこにか 駒を繋がむ 朝日子が さすや岡辺の 玉笹の上

に 玉笹の上に 蘭 15 ③

いつしかと君にと思ひし若菜をば法の道にぞけふはつみける

早 4 ②

いつしかと待乳の山の桜花まちてもよそにきくが悲しさ 手 11

①

いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしかりけり

桐 27 ②・若 45・薄 26 ②・玉 14・宿 55 ①・浮 34

いつとても月みぬ秋はなきものをわきて今宵のめつらしきかな

鈴 5

いつのまに恋しかるらむ唐衣濡れにし袖のひるまばかりに 葵

12

いつとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふことの限りなりける

蜻 31

いつはりと思ふものから今さらにたがまことをか我は頼まむ

梅 20

いつはりとなれならはして限りなき我がまことをもつたがはす

らむ 澤 4・朝 23

いつまでか野べに心のあくがれむ花し散らずは千代も経ぬべし

梅 10・柏 2 ②

いつみなる信太の森の楠の木のちへに別れてものをこそ思へ

菜上 48 ④・霧 31 ②

何れをか雨ともわかむ山伏の落つる涙もふりにこそふれ 手 27

出でゝ去なば心かるしといひやせむ世の有様を人は知らねば

初 14・宿 36

出でゝ去なば誰か別の難からむ有りしにまさる今日は悲しも

行 12・14・浮 19

いで人はことのみぞよき月草のうつし心は色ことにして 葵 16

⑦・橋 2 ②・総 56・宿 44

いで我を人なとがめそ大舟のゆたのためたに物思ふ頃ぞ 夕

10・須 53 ①・玉 10・橋 2 ①

いとけなき衣の袖は狭くともこふの石をばなで尽してむ 明 25

いとせめて恋しき時はうば玉のよるの衣を返してぞぬる 玉 40

①・44

いとゞこそまさらにまされ忘れじといひしにたがふ事のつらさ

は 明 18 ②・蓬 33 ①

いとゞしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくも返る波かな

須 22・松 7・玉 5

いとによるものならなくに別れ路の心ばそくも思はゆるかな

総 4

厭ひては誰か別れのかたからむありしにまさる今日は悲しも

若 42 ①

いなせともいひ放たれず憂き物は身を心ともせぬよなりけり

御 19・総 18 ①・宿 26・浮 9 ①・蜻 16

いな筵河ぞび柳水ゆけば起きふしすれどその根たえせず 椎 3

いなりにもいはると聞きしなき事をけふはただすの神にまかす

る 幻 25 ②

いにしへに猶たち返る心かな恋しきことにもの忘れせで 桜 1

いにしへのあとを見つゝも惑ひしをいまゆく末をいかにせよと

ぞ 幻 42 ③

古のこと語らへばほとときすいかに知りてか古声のする 散 8

①・幻 29・蜻 13 ②

古のしづのをだまきくり返し昔を今になすよしもがな 賢 41・

菜上 56

古の小竹田^{しのだ}壮士^{きよと}の妻問ひし菟原^{うはら}処女の奥津城^{おくつぎ}ぞこれ 浮 47 ④

古のなきにながるゝ水茎の跡こそ袖の浦によりけれ 梅 14 ②

古の七の賢^{さか}しき人どもも欲^ほりせしものは酒にしあるらし 菜下

62 ④

古の野中の清水ぬるけれどもとのこゝろをしる人ぞくむ 蓬 27

①

古への野中の清水みるからにさしぐむものは涙なりけり 帚

21・若 20 ①

いにしへの古き翁の祝ひつゝ植ゑこし松は苦むしにけり 藤 30

②

いにしへの昔のことをいとゞしくかくれば袖に露けかりける

薄 21 ①

いにしへも今も昔も行末もかく袖くたすたぐひあらじな 総 67

①

古へも契りてけりなうちはおき飛び立ちぬべし天の羽衣 末 21

②

大上のとこの山なるなとり川いさと答へよ我が名もらすな 賀

35・朝 20 ①・30・玉 3・浮 27

命だにあらば見るべき身の果てを忍ばむ人もなきぞ悲しき 若

31 ③

命だに心になふものならば何か別れの悲しからまし 若 31

①・葵 51 ①・霧 8・蓬 20 ①・薄 17・柏 22・霧 46 ①・55・手 20

命やは何ぞは露のあだ物をあふにしかへば惜しからなくに 菜

下 38

祈りつつ頼みぞ渡る初瀬川嬉しきせにも流れあふやと 玉 27・

28 ④・早 28 ②・蜻 26 ①

祈りつつ結ぶはかまの腰にまたたすきに千代をかけてけるかな

薄 10 ①

岩くゞる山井の水を結びあげて誰がため惜しき命とかしる 総

66

磐代^{いはよ}の野中に立てる結び松情^{こころ}も解けず古思ほゆ 常 10

石瀬野に秋萩^{あき}凌ぎ馬並めて初鷹^{はつたか}狩だにせずや別れむ 手 10 ①

岩そそぐ垂水の上の早蕨の萌え出づる春になりにけるかな 蓬

11

いはぬまをつゝみし程にくちなしの色にやみえし山吹の花 真

36 ②・37 ①

岩橋のよるの契りも絶えぬべし明くる佐しきかつらぎの神 夕

22

祝ひつる言だまならば百年の後も尽きせぬ月をこそ見め 柏 29

②

伊波保^{いはほ}の傍^{もと}の若松かぎりとや君が来まさぬうらもとなくも

明 47 ⑦

いひ立てば誰が名か惜しき信濃なる木曾路の橋のふみし絶えな

ば 霧 78 ①

いふからにつらさぞ増る秋の夜の草の閉しに障るべしやは 若

54 ③

いふ言の恐^{おそ}き国そ紅の色にな出でそ思ひ死ぬとも 菜上 18 ②

家にあれば筈に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る 宿 19

③

いへばえにいはねばくるし世の中をなげきてのみもつくすべき

かな 須 6 ③

いへばえにいはねば胸にさわがれて心ひとつに歎くころかな

須 6 ②

いへばえに深く悲しき笛竹の夜声やたれとふ人もがな 須 6

①

今こそあれ我れも昔は男山さかゆく時もありこしものを 花 9

①

今こむといひしばかりに長月の有明のつきを待ち出でつるかな

宿 15 ①

今さらに老の袂に春日野の人わらへなる若菜つむかな 葵 7 ②

今さらにとふべき人も思はず八重葎してかどさせりてへ 桐

31 ③・帯 15・須 42 ①・蓬 6・竹 35 ②

今さらに何おひ出づらむ竹の子のうき節しげきよとは知らずや

蓬 2 ①・胡 21 ②・柏 31・横 6

今さらに睦言のねに引き懸り苔の山路を忘れやはせむ 明 42

今ぞ知る苦しきものと人またむ里をばかれずとふべかりけり

帯 49・早 14 ①

今はたゞ思ひ絶えなむとばかりを人づてならでいふよしもがな

朝 17 ①

今はたゞそよ其の事と思ひ出でて忘るばかりのうきこともがな

若 39・幻 18

今はとて天の羽衣きるをりぞ君をあはれと思ひ出でける 若 25

今はとて梢にかかる空蟬のからを見むとはおもはざりしを 空

8 ②・夕 69 ②・70 ③

今はとて島漕ぎ離れ行く船にひれふる袖を見るぞ悲しき 澤 20

①

今はとて忘るゝ草のたねをだに人の心にまかせずもがな 東 18

②

今までに出で立たぬ身は百敷の宮の桜を見でや止みなむ 若 7

今までに忘れぬ人は世にもあらじおのが様々年の経ぬれば 松

33

今もかもさき匂ふらむたち花のこじまのさきの山吹の花 浮 24

夢にだに何かも見えぬ見ゆれども吾かも迷ふ恋の繁きに 桐

13・夕41①・霧54

妹が門 夫が門 行き過ぎかねてや 我が行かば 脇笠の 脇

笠の 雨もや降らなむ しでたをさ 雨やどり 笠やどり
宿りてまからむ しでたをさ 若53⑧・末10・15・須69②

妹が門行き過ぎかねつひさかたの雨もふらぬかそをよしにせむ

若53④

妹が門行き過ぎかねつひち笠の雨もふらなむあまがくれせん

若53②・須69①

妹が門行き過ぎかねて草結ぶ風吹き解くなまた顧みむ 若53①

妹が名に懸けたる桜花咲かば常にや恋ひむいやとしのはに 浮

47⑨

妹が名は千代に流れむ姫島の子松が末にこけむすまでに 藤30

③

婦と我と いるさの山の 山 手な取り触れそや 貌優る

がにや 速く優るがにや 横21

伊予の湯のゆけたの数は左八つ右はここのつ中は十六 空3②

伊予の湯の 湯桁は幾つ いさ知らず や 算へず数まず や

れ そよや なよや 君ぞ知るらうや 空3①

いろかへぬ花たちばなにはとぎす千世をならせる声きこゆな

り 幻26

色ならば移るばかりもそめてまし思ふ心をえやはみせける 葵

47

色みえて移ろふものは世の中の人の心のはなにぞありける 野

5 (い)

色もかもまつ我が宿の梅をこそ心しれらむ人は見にこめ 紅7

②

色も香も昔のこさに匂へどもうあけむ人の影ぞこひしき 幻16

②

色よりも香こそあはれと思ほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも 匂

5①・竹4・早17②・手36

う

うきしまや憂きたびごとになそしまやなそせしわざぞ心づくし

に 桜10

憂きながら消えせぬ物は身なりけりうらやましきは水の泡かな

柏27②・宿43

憂きながらさすがに物の悲しきは今は限りと思ふなりけり 夕

51・蓬10・真16

憂きによりひたや籠りと思ふとも近江の海は打出でゝ見よ 帚

42・霧41

憂き世には行き隠れなでかき曇りふるは思ひのほかにもあるか

な 幻6①

鶯の 生卵の中に 霍公鳥 独り生れて 己が父に 似ては鳴

かず 己が母に 似ては鳴かず 卵の花の 咲きたる野辺ゆ

飛びかけり 来鳴き響もし 橘の 花を居散らし 終日に

鳴けど聞きよし 幣はせむ 遠くな行きそ わが屋戸の花

橘に 住み渡れ鳥 散9④

鶯の来鳴く山吹うたかたも君が手解れず花散らめやも 真31③
鶯の声まち出づる春しもぞそのうれしき事はありける 初15

⑤

鶯の鳴くなる声は昔にてわが身一つのあらずもあるかな 少22
鶯の鳴く音のどかに聞こゆなり花のねぐらも動かざらん 初

15④

鶯の羽風になびく青柳のみだれて物を思ふころかな 菜下20
鶯のはるさめくと鳴きをるはこのめも物を思ふなるべし 柏

44③

鶯のわれて羽ぐむ桜花思ひぐまなくとも散るかな 竹15②
憂くも世に思ふ心にはなぬか誰も千年の松ならなくに 柏

3・宿48

うけれどもいけるはさてもあるものを死ぬるのみこそ悲しかり
けれ 須19

13

うしと思ふものから人の恋しきはいづこを忍ぶ心なるらむ 霧
薄くこき色はまがへど花といへば一つ顔にも見え渡るかな 若

23⑦

うたかたも言ひ一つもあるか吾ならば地には落ちず空に消なま
し 真31⑤

薄32①

宇治河の波の枕に夢さめて夜の橋姫いやねざるらん 橋18

宇治川の波の夜々音をぞ泣く網代もるてふ人のつらさに 橋32

①

打ち忍び歎き明かせばしのめのほがらかにだに夢をみぬかな
菜上5

うちそばみ君ひとり見よまろ小菅まろはひとすげなしといふな
り 桐22②

打ち散らし雪は降りつゝしかすがにわが家の園に鶯ぞなく 行

8

打ちつけに寂しくもあるか紅葉はも主なき宿は色なかりけり
朝2・早33③

うちはへて影とぞ頼む峰の松色どるあきの風にうつるな 藤31
打ちはへて音をなき暮すうつ蟬の空しき恋も我はするかな 空

8①

うち日さす宮にはあれど鴨頭草の移ろふ心わが思はなくに 葵
16⑤

宇治山の紅葉をみずは長月の過ぎ行く日をも知らずぞ有まし
橋32②・総49

うち渡すをちかた人にも申すわれそのそこに白くさけるはな
にの花ぞも 夕6

打ちわびてよばらむ声に山彦の答へぬ山はあらじとぞ思ふ 夕

40①

うつせみのうつし心も我は無し妹を相見ずて年の経ぬれば 葵
16③

うつせみの羽におくつゆの木がくれてしのびしのびにぬるる袖

かな 空 14

うつせみの世は常なしと知るものを秋風寒み偲ひつるかも 夕

63・葵 36 ③

うつ蟬はからを見つゝもなぐさめつ深草の山煙だにたて 桐

17・柏 13・御 16・総 76・浮 54 ⑨・蜻 5

うつたへに鳥は咲まねど縄延へて守らまく欲しき梅の花かも

蘭 4 ④

うつたへに籬の姿見まく欲り行かむと言へや君を見にこそ 蘭

4 ③

うつつにてたれ契りけむ定めなき夢路にまよふ我はわれかは

澤 5・松 44・真 28 ②

移ろはむことだに惜しき秋萩にをれぬばかりも置ける露かな

末 19・東 26

優婆塞があざ名に刻む松の葉は山の雪にや埋もれぬらむ 夕 32

①・総 9 ③

優婆塞がおこなふ山の椎がもとあなそばくしとこにしあらね

ば 桐 61・夕 32 ②・橋 19・椎 41 ①

うはべなき妹にもあるかもかくばかり人の情を尽くさく思へば

帯 12 ②

うはべなきものかも人はしかばかり遠き家路を還さく思へば

帯 12 ①

梅が枝にきゐる鶯春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝ 梅 8

②・幻 11 ②・浮 20 ①

梅が枝に 来居る鶯や 春かけて はれ 春かけて 鳴けど

もいまだや 雪は降りつつ あはれ そこしや 雪は降

りつつ 梅 8 ①・竹 5 ①・浮 20 ②

梅の香をさくらの花ににははせて柳が枝に咲かせてしがな 薄

28・菜上 41

梅の花香はことごとくに匂はねど薄くこくこそ色は咲きけれ 紅

5 ②

梅の花香をふきかくる春風にこゝろをそめば人やとがめむ 梅

5 ②

梅の花木つたひちらす鶯のうつし心も我がおもはなくて 葵 16

①

梅の花さくと知らずやみ吉野の山に友まつ雪のみゆらむ 菜上

39 ③

梅の花咲ける岡べに家しあれば乏しくもあらず鶯の声 初 16

梅の花それとも見えず久方のおまぎる雪のなべてふれゝば 菜

下 18

梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみける

梅 5 ①・句 5 ④・8・紅 5 ②・橋 36・早 6 ②・宿 67

梅の花をりしまどへば足引の山路の雪と思ほゆるかな 幻 43 ③

浦風になびきにけりな里のあまのたくもの煙心よわさは 浮 44

①

浦ちかくふりくる雪は白波のすゑの松山とすかとぞ見る 末 26

②・明 47 ②

うらなれたるや浦の浦かな風は吹かねどさゝら波ぞたつ

明 27

浦人の袖ふる事は遠けれど波の立ちゐにあはれとは見き 賀1

③

恨みての後さへ人のつらからばいかに言ひてかねをも泣かまし

薄2・紅4

恨みてもなきてもいはむ方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして 浮

32

恨みぬも疑はしくぞ思ほゆる頼む心のなきかと思へば 帚35

恨むべきほどはなけれどおほかたもとはぬはつらき物にぞあり

ける 若30③

うらもなく去にし君ゆゑ朝な朝なもとなぞ恋ふる逢ふとは無け

ど 明47④

うらも無くわが行く道に青柳の萌^はりて立てればもの思ひ出づも

明47⑥

うら若みねよげに見ゆる若草を人の結ばむ事をしぞ思ふ 若11

①・61・胡25①・常32③・総59

嬉しきもうきも心はひとつにて別れぬものは涙なりけり 葵26

①・須59・藤23・柏40

嬉しきを何につまむ唐衣袂ゆたかにたてといはましを 明30

②・蓬3①

嬉しくは忘るゝ事もありなましつらきぞ長き形見なりける 葵

48①・竹21②

うれしさを昔は袖につつまけりこよひは身にもあまりぬるかな

明30①・蓬3②

植ゑし時契りやしけむたけくまの松を二たび逢ひ見つるかな

薄9

植ゑしよりなだたる園の菊なれば玉と見へてや露もをくらん

藤26③

植ゑ立てて君がしめゆふ花なれば玉と見えてや露もおくらむ

野1

植ゑて見し主なき宿の桜花いろばかりこそむかしなりけれ 幻

16①・早33①

え

えぞしらぬ今心見よ命あらば我や忘るゝ人やとはぬと 若31

②・蓬20③・宿27・桜3

枝よりもあだにちにし花なれば落ちて水の水の泡とこそなれ

竹16

お

老ぬれば同じことこそせられけれ君は千世ませ君は千世ませ

松4

老いぬればさらぬ別れもありといへばいよく見まくほしき君

かな 夕11①・47・松12①・菜上2①

沖つ風いたく吹きせば吾妹子が歎きの霧に飽かましものを 明

60④

奥津島雲居のきしを行きかへりふみかよはさむ幻もがな 桐50

沖つ鳥鴨といふ船の還り来ば也良^{やち}の埒^{さかい}守早く告げこそ 須48

②・東30①

沖つ鳥鴨かも著く島に我があ寝し妹は忘れし世のことごとく 須48

①

おきつなみ あれのみ増る 宮のうちは 年へてすみし 伊勢

のあまも ふね流したる こゝちして よらむ方なく かな

しきに なみだの色の くれなるは われらが中の しぐれ

にて 秋のもみちと ひとくは 己がちりく わかれな

ば 頼むかけなく なりはてゝ とまる物とは はなすゝき

きみなき庭に むれたちて 空をまねかば はつがりの な

き渡りつゝ よそにこそ見ぬ 賢23①・菜上1②

おきつ波辺浪の来寄る左太さだの浦のこのさだ過ぎて後恋ひむかも

若33・56②

おきて行くかたも知られず迷ふかな涙も袖もめにさはりつゝ

菜下40②

翁さび人なとがめそ狩衣けふばかりとぞたづもなくなる 須53

②・行4・7①・菜上62

翁とてわびやはをらむ草も木もさかゆる時に出でて舞ひてむ

花9②

起きもせず寝もせず夜を明しては春の物とて眺め暮しつ 菜上

75

おきもぬぬ我が常世こそ悲しけれ春帰りにし雁も鳴くなり 須

51④・幻23①

おく霜に色も変らぬ柿葉の薫るや人のとめてきつらむ 賢7

③・10②

置く霜の心やわける菊の花移ろふ色の己がじゝなる 帯9④

置く露のかゝる物とは思へどもかれせぬものは撫子の花 帯62

置く露を別れし君と思ひつゝ朝なゝぞ悲しかりける 幻34

奥山にたぎりて落つる滝つ瀬の玉ちるばかり物な思ひそ 葵19

②

奥山のいはがき紅葉ちりぬべしてゐる日の光見る時なくて 総55

①

奥山の苔の衣にくらべ見よいつれか露のおきはまさと 若18

奥山のはれぬしぐれぞわび人の袖の色をばいとましける 総

11

奥山の真木の板戸をおし開きしゑや出で来ぬ後は何せむ 若23

③

奥山の真木の板戸を音速み妹があたりの霜の上に寝ぬ 若23④

奥山の真木の板戸をとどとして我が開かむに入り来て寝なさね

若23⑤

奥山の松には氷る雪よりも我が身よにふる程ぞはかなき 椎34

①

奥山のゆづる葉いかで折りつらむ文目も知らず雪のふれるに

夕9①

落ちたぎつ滝の水上年積り老いにけらしな黒き筋なし 初24①

落ちつもる朽ち葉が下のみなしぐりあるかなきかの世をいかに

せん 総7②

音せぬは苦しきものを身にちかくなるてふ厭ふ人もありけり

帯78・宿73

音なしの河とぞ遂に流れ出づるいはでもの思ふ人の涙は 行1

④

音無し山の山の下行くさゞれ水あなかも我も思ふころかな 帯75

①

音に聞きめにはまだ見ぬ播磨なるびびきの灘と聞くはまことか

玉18④

音にきくこまのわたりの瓜作りとなりかくなりなる心かな 真

17

音にきく松が浦島今日ぞ見るむべも心あるあまは住みけり 賢

58・須28②・34⑤・初29・霧73②

音もせで思ひに燃ゆる螢こそなく虫よりも哀れなりけれ 螢3

同じえをわきて木の葉の移ろふは西こそ秋のはじめなりけれ

藤32・総28

同じくは君とならびの池にこそ身を投げつとも人に聞かせめ

明48

おなじ野の露はいづれもとまらねどまづ消ゆとのみきくがくる

しさ 蘭5

おのがじし人死にすらし妹に恋ひ日にけに瘦せぬ人に知らえず

帯9①

おひ初むるねよりぞ著き笛竹の末の世長くならむ物とは 横23

おふれども駒もすさめぬ菖蒲草かりにも人のこめがわびしき

螢9②

大荒木の森の下草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし 賀16

①・18②・花7①・螢9⑥

大海の磯もとゆすり立つ波の寄らむと思へる浜の清けく 葵24

①

大方におく白露も今よりは心してこそ見るべかりけれ 早6①

大かたの秋に心はよせしかど花みる時はいづれともなし 薄24

①・少28①・野3⑥・4③

大方の秋のさがとは知りながら萩吹く風はまづは身にしむ 少

10①

大方の秋の空だにわびしきに物思ひそふる君にもあるかな 葵

44②

大方の秋のはてだに悲しきに今日はいかでか君暮すらむ 朝1

①

大方の秋を悲しみみることもあてなる人は知らずぞ有りける

帯91

大方のわが身一つの憂きからになべての世をも恨みつるかな

葵32・蓬4②・関9・菜下47・柏1・鈴15・橋17②・早19・

宿62①・東8①

大方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの 横

24・宿15②・20①

大方も秋はわびしき時なれど露けかるらむ袖をしぞ思ふ 桐43

②

大君の 遠の朝廷^{みくに}を しらぬひ 筑紫の国に 泣く子なす 慕

ひ来まして 息だにも いまだ休めず 年月も いまだあら

ねば 心ゆも 思はぬ間に うち靡き 臥しぬれ 言はむ術

為む術知らに 石木をも 問ひ放け知らず 家ならば 形は
あらむと うらめしき 妹の命の 我をばも 如何にせよと
か 鳩鳥の 二人並び居 語らひし 心背きて 家ざかりい
ます 螢10②

天皇の 御命かしこみ 柔びにし 家をおき 隠国の 泊瀬の
川に 舟浮けて わが行く河の 川隈の 八十限おちず 万
度 かへり見しつ 玉梓の 道行き暮らし あをによし

奈良の京の 佐保川に い行き至りて わが宿たる 衣の上
ゆ 朝月夜 さやかに見れば 栲の穂に 夜の霜降り 磐床
と 川の水凝り 寒き夜を いこふことなく 通ひつ 作

れる家に 千代までに 来ませ大君よ われも通はむ 須56
大坂に継ぎ登れる石群を手ごしに越さは越しかてむかも 夕25

大島に水をはこひじはや舟の早くも人にあひ見てしがな 玉17
大空におほふばかりの袖もがな春さくはなを風にまかせじ 滯

3・野7・幻14・竹17①
大空にむれたるたつのさしながら思ふ心のありげなるかな 菜

上10①
大空の月だに宿に在るものを雲のよそにも過ぐる君かな 宿13

大空は恋しき人の形見かはもの思ふごとくに眺めらるらむ 葵28
柏46②・霧44③・幻28・30・竹23・総54

大空を取りかへすとも聞かなくに星かと思ゆる秋の菊かな 賢
42④・菜上16②

大空を独り眺めて彦星のつまゝつ夜さえひとりかも寝ん
桜8

おぼつかかな今日は子の日かあまならば海松をしぞ引くべかりけ
る 霽9

大鳥のはねやかたばになりぬらんいまは乙箭に霜の降るらん
帝8④

大汝小彦名の 神代より 言ひ継ぎけらく 父母を見れ
ば尊く 妻子見れば 愛しくめぐし うつせみの 世の理と
かく様に 言ひけるものを 世の人の 立つる言立 ちさの

花 咲ける盛りに はしきよし その妻の児と 朝夕に 笑
みみ笑ますも うち歎き 語りけまはくは 永久に かくしも
あらめや 天地の 神こと寄せて 春花の 盛りもあらむと

待たしけむ 時の盛りそ 離れ居て 歎かす妹が 何時しか
も 使の来むと 待たすらむ 心さぶしく 南風吹き 雪消
まさりて 射水川 流る水沫の 寄る辺無み 左夫流その児

に 紐の緒の いつがり合ひて 鳩鳥の 二人並び坐 奈呉
の海の 沖を深めて さどはせる 君が心の 為方もすべ無
さ 帝40・螢10③

大穴道少御神の作らしし妹背の山を見らくしよしも 蘭12④
大ぬさと名にこそ立てれ流れても終による瀬はありてふものを
菜下28②・東13

大ぬさの引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ
・東12

大の浦のその長浜に寄する波ゆたけく君を思ふこの頃 行10
大野山霧立ち渡るわが歎くおきその風に霧立ちわたる 明60⑤

大原やをしほの山のこまつ原はや木高かれ千代の影みむ 行7

②

大原や小塩の山もけふこそは神世のことと思ひ出づらめ 賀36
大船を荒海に漕ぎ出弥船たけわが見し児らが目見は著しも 桐

12

おぼめくな誰ともなくて宵々に夢にみえけむ我ぞその人 散2

②

大淀の浦立つ波の返らずは菱らぬ松の色を見ましや 賢1②・

2②

大井川うかべる舟の篝火にをぐらの山も名のみなりけり 霧59

③

おもしろのめでたき事をくらぶるに春と秋とはいづれまされる

野3③

思はじと思ふ物から夏の雨の振りすてがたき君にもあるかな

葵17②

思はじとおもふものを思ふなり思はじとだにおもはじやなぞ

葵17①

思はぬを思ふといはば大野なる三笠の社の神し知らさむ 明46

②

思はむと頼めしこともある物をなき名を立てゝただに忘れね

東20

思はむと頼めし人はありときくいひし言の葉いづちにけむ

蓬33②

思ひあまり出でにし魂のあるならむ夜深く見えはたま結びせよ

葵14①・19⑤・20①・柏12①・浮57①

思ひあまりわびぬる時は宿かれてあくがれぬべき心ちこそすれ

真18②

思ひいづるときはの山の郭公から紅のふり出てぞ鳴く 藤18

思ひ出でゝおとつれしける山彦の答へにこりぬ心何なり 葉下

40④

思ひ川たえず流るゝ水の泡のうたかた人にあはで消えめや 真

31④

おもひきやきみが衣をぬぎかへてこき紫のいろをきむとは 藤

25①・葉下31

思ひきやひなの別れにおとろへて海人のなはたきいさりせむと

は 須54・蓬36・薄30・玉8

思ひくれ歎き明石の浜によるみるめ少くなりぬべらなり 明26

①

思ひけむ人をぞ友に思はましまさしや報ひなかりけりやは 柏

15

思ひつゝぬればや人の見えつらん夢としりせばさめざらましを

蜻2①

思ひつゝねなくに明くる冬の夜の袖の水はとけずもあるかな

真10

思ひには我こそ入りて惑はるれあやなく君や涼しかるべき 葉

下50

思ひます人しなればます鏡うつれる影と音をのみぞ鳴く 宿

42

思ひやる心ばかりはさはらじをなにへだつらむ峯の白雲 橋31

②

思ひやれ霞こめたる山ざとに花まつほどの春のつれ／＼ 椎 10

思ふ事ありてこそ行け春霞道さまたげに立ちなかくしそ 柏 36

思ふこといはでぞただにやみぬべき我とひとしき人しなれば

桐 34・東 23 ②

思ふこと昔ながらの橋柱ふりぬる身こそ悲しかりけれ 賀 22 ①

思ふてふことより外に又もがな君一人をばわきて忍ばむ 蜻 33

思ふてふ人の心のくまごとに立ち隠れつゝみる由もがな 帝 22

思ふてふ我がことの葉をあだ人のしげき歎きにそひてうらむな

関 7 ②

思ふどちいざ見に行かむたまつ鳥いり江の底にしつむ月かげ

明 38

思ふどちひとり／＼が恋ひしなばたれによそへて藤衣きむ 椎

14

思ふどちまどるせる夜は唐錦たゝまく惜しき物にぞありける

玉 42・菜下 4

思ふとていとこそ人に馴れざらめしかならひてぞみねば恋しき

帝 6・夕 60・須 67・霧 29・45

思ふとはつみしらせてきみゝなぐさ童あそびのてたはおれより

横 12

思ふとも恋ふとも言はじくちなしの色に衣を染めてこそきめ

真 36 ⑤

思ふには忍ぶることぞまけにける色には出でじと思ひしものを

明 29・竹 9

思ふ人おもはぬ人の思ふ人思はざらなむおもひしるべく 薄 27

②

思へどもあひも思はぬかななにの岩木のなれるなるらん 東

10 ①

思へども綾なしとのみいはるれば夜の錦の心地こそすれ 松 10

②

思へども思むとていはぬ事なればそなたをむきて音をのみぞな

く 朝 21・菜下 44

思へども身をし分けねばめに見えぬ心を君にたぐへてぞやる

末 1 ②・句 3 ②

親の親と思はましかば問ひてまし我が子の子には非ぬなるべし

桐 56・朝 16

おろかなる涙ぞ袖に玉はなすわれはせきあへず滝つ瀬なれば

蜻 15

か

鏡山いざ立ち寄りて見てゆかむ年へぬる身は老やしぬると 菜

上 29

鏡山きみが影もやそひたると見ればかたちはことにぞありける

少 20

かゝらでも雲井のほどは歎きしに道をさへせく山路なるらん

桜 6

かがり火の影となる身のわびしきは流れて下にもゆるなりけり

薄 31

かゝる秋を君にまかせて我はただのどけき春をまつぞ苦しき

少28②

かゝる瀬もありける物をとまりゐて身を宇治河と思ひけるかな

行6①・早28③

かきくらす心の闇にまどひにきゆめ現とは世人さだめよ 明43

③

垣越しに散り来る花を見るよりは根ぐめに風の吹きもこさなむ

早17①

書きつくる跡は千歳もありぬべし忘れずしのお人やなからん

幻41①・橋43

かぎりある別れのみこそかなしけれ誰も命を空に知らねば 初

30

限りあればけふぬぎ捨てつ藤衣はてなきものは涙なりけり 蘭

3②・椎22・早12・22①

限りなき思ひの空にみちぬればいくその煙雲となるらむ 葵39

①

限りなき君がためにと折る花は時しもわかぬ物にぞありける

少21・行6②

限りなき雲居のよそに別るとも人を心におくらさむやは 若

10・霧64

限りなき名におふ藤の花なればそこひもしらぬ色の深さか 胡

13②・24②

限りなく思ふながらの橋柱おもひながらになかやたえなむ 賀

22③

かくこひむ物とは我も思ひにき心のうらぞまさしかりける 薄

6

かくてこそ見まほしけれ万代をかけてしのべる藤波の花 宿

68

かくばかり恋ひつつあらずは石木にもならましものを物思はず

して 東10②

かくばかり惜しと思ふ夜をいたづらに寝て明すらむ人さへぞ憂

き 横22

かけていへば涙の川のせを早み心づからや又は泣かれむ 朝18

①

懸けまくも あやに畏し 皇神祖の 神の大御代に 田道間守

常世に渡り 八矛持ち 参出来し時 時じくの 香の木の実

を畏くも 遺したまへれ 国も狭に 生ひ立ち栄え 春さ

れば 孫枝萌いつつ 霍公鳥 鳴く五月には 初春を 枝に

手折りて 少女らに つとも遣りみ 白袴の 袖にも扱入

れ 香細しみ 置きて枯らしみ あゆる実 は 玉に貫きつつ

手に纏きて 見れども飽かず 秋つけば 時雨の雨降り あ

しひきの 山の木末は 紅に にほひ散れども 橘の 成れ

るその実は 直照りに 弥見が欲しく み雪降る 冬に到れ

ば 霜置けども その葉も枯れず 常磐なす いや栄映えに

然れこそ 神の御代より 宜しなへ この橘を 時じくの

香の木の実と 名づけけらしも 須51③

かけまくも ゆゆしきかも 言はまくも あやに畏き 明日香

の 真神の原に ひさかたの 天つ御門を かしくも 定

めたまひて 神さぶと 磐隠ります やすみしし わご大君
 の きこしめす 背面の國の 真木立つ 不破山越えて 高
 麗劍 和さみが原の 行宮に 天降り座して 天の下 治め
 給ひ 食す國を 定めたまふと 鶏が鳴く 吾妻の國の 御
 軍士を 召し給ひて ちはやぶる 人を和せと 服従はぬ
 國を治めと 皇子ながら 任せ給へば 大御身に 太刀取り
 帯ばし 大御手に 弓取り持たし 御軍士を あどもひたま
 ひ 齊ふる 鼓の音は 雷の 声と聞くまで 吹き響せる
 小角の音も 敵見たる 虎か吼ゆると 諸人の おびゆるま
 でに 捧げたる 幡の靡は 冬ごもり 春さり来れば 野ご
 とに 着きてある火の 風の共 靡くがごとく 取り持てる
 弓弦の騒 み雪降る 冬の林に つむじかも い巻き渡ると
 思ふまで 聞きの恐く 引き放つ 矢の繁げく 大雪の 乱
 れて来れ 服従はず 立ち向ひしも 露霜の 消なば消ぬべ
 く 行く鳥の あらそふ間に 渡会の 斎の宮ゆ 神風に
 い吹き惑はし 天雲を 日の目も見せず 常闇に 覆ひ給ひ
 て 定めてし 瑞穂の國を 神ながら 太敷きまして やす
 みしし わご大王の 天の下 申し給へば 万代に 然しも
 あらむと 木綿花の 栄ゆる時に わご大王 皇子の御門を
 神宮に 装ひまつりて 使はしし 御門の人も 白袴の 麻
 衣着 壺安の 御門の原に 茜さす 日のことごと 鹿じも
 の い匍ひ伏しつゝ ぬばたまの 夕になれば 大殿を ふ
 り放け見つゝ 鶉なす い匍ひもとほり 侍へど 侍ひ得ね
 ば 春鳥の さまよひぬれば 歎きも いまだ過ぎぬに 憶

ひも いまだ尽きねば 言さへく 百済の原ゆ 神葬り 葬
 りいまして 麻裳よし 城上の宮を 常宮と 高くまつりて
 神ながら 鎮まりましぬ 然れども わご大王の 万代と
 思ほしめして 作らしし 香具山の宮 万代に 過ぎむと思
 へや 天の如 けり放け見つゝ 玉櫛 かけて思はむ 恐か
 れども 賢14

影みてもうきわが涙落ちそひてかごとがましき滝の音かな 松
 24

影みればいとゞ心ぞ惑はるゝ近からぬけの疎きなりけり 霧71

② かげろふのさやにこそめめぬば玉の夜のひとめは恋しかりけり

蜻 36 ⑤ かげろふのそれかあらぬか春雨のふる人なれば袖ぞぬれぬる

蜻 36 ④ かげろふのほのめきつれば夕暮のゆめかとのみぞ身をたどりつ

る 桐33・蜻36 ⑥ かこつべき人もなきよに武蔵野の若紫をなににめづらむ 若62

① かこはねと蓬のまがき夏くればうゑし垣根もしげりあひにけり

散6 ② 鵲の渡せる橋の霜の上を夜はに踏み分けことさらにこそ 末7

かざすとも立ちと立ちなむ無き名をば事無し草のかひやなから
 ん 帝3

かざせども老も隠れぬこの春ぞ花のおもてはふせつべらなる

帝39・松1・菜上6

柏木の森の下草老いの世にかゝる思ひはあらじとぞ思ふ 玉29

①

鹿島よりかせぎにのりて春日なる三笠の山のうきぐもの宮末

35 ④

かずかずと思ひ思はずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

明34 ②・浮38 ①

数々に君がたよりて引くなれば柳の眉もいまぞひらくる 夕5

春日野の浅茅が原におくれ居て時ぞとも無しわが恋ふらくは

賢29 ①

春日野の青嶺が峯の苔むしろたれか織りけむたてぬきなしに

若12 ②

春日野の雪の下草人知れずとふひ有りやと我ぞ待ちつる 玉29

③

春日野の若菜つみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ 若35

春日野の若菜のすりごろもしのぶのみだれかぎり知られず 帚

2 ①・玉1 ②・行5・蘭12 ⑥

数しらず君が齢をのばへつゝなだゝる宿の露とならなむ 野4

①・藤26 ①

数ならぬ心に身をば任せねど身にしがふは心なりけり 浮9

②

かずならぬ身には思ひのなかれかし人なみくぬるゝ袖かな

東18 ①

数ならぬ身のみものうくおもほえて待たるまでもなりにける

かな 賢51

霞たちこのめも春の雪ふれば花なき里も花ぞちりける 初3
風の上にありか定めぬ塵の身は行方も知らず成りぬべらなり

夕44・野16・17

風の音の秋にもあるかな久方の天つ空こそ変るべらなれ 舞3

②

風はやみ峯の葛葉のともすればあやかりやすき人の心か 霧50

風吹くと人にはいひて戸はさゝじ逢はむと君にいひてし物を

空4

風を痛みくゆる煙の立ちいでゝ猶こりずまの浦ぞ恋しき 夕65

②・須35・葉上53

かぞいろはいかにあはれと思ふらむみとせになりぬ足たたずし

で 明57 ①・松45・玉36

かぞへしる人なかりせばおく山の谷の松とや年をつまゝし 菜

上24 ①・28

数へつゝさてもありつる世を背くうしろでともぞ思ひやらるゝ

総41 ①

片糸をこなたかなたによりかけてあはずは何を玉の緒にせむ

横20・総6

片岸の松のうきねと忍びしはさればよ遂に頭はれにけり 帚87

形こそ山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ 薄5・

竹3 ①・橋41 ①・総7 ①・宿71・手29

かたはなるなの乙節にも聞こゆれば思ひいらるゝころにもある

かな 帚8 ①

かたみなる色に衣はなりぬれど花の香はよにつねならなくに

真36 ①

片岡の向の峰に椎時かは今年の夏の蔭にならむかも 椎41 ②
 かつ消えて空もみだるるあわ雪はもの思ふ人の心なりけり

真15 ①・菜上38

かつまたの池にたちにし昔より世はうき物と思ひしりにき 澤

14

かつみつゝかげ離れ行く水の面にかく数ならぬ身をいかにせむ

帯38

葛城の寺の前なるや 豊浦の寺の 西なるや 榎の葉井に

白壁沈くや 真白壁沈くや おおしとど おしとど しかし

ては 国ぞ榮えむや 我家らぞ 富みせむや おおしとど

としとんど おしとんど としとんど 若28・菜下27

悲しさぞまさりにまさる人の身にいかに多かる涙なるらむ

幻32

かにかくに人は言ふとも若狭道の後瀬の山の後も逢はむ君 帯

86 ③・総24 ③

かねてよりつらさをわれにならはさではかにものを思はする

かな 菜上8・霧35・宿4・29

河風の寒き長谷を敷きつつ君があるくに似る人も逢へや 菜下

8

河上やかさぎのいは屋けを寒み苔をむしろとならす優婆塞 竹

26

河口の関の荒垣いかなれば夜の通ひを許さざるらむ 藤15 ②

河口の関のあら垣守れども出て我寝ぬしのびくに 藤15 ③

河口の 関の荒垣や 関の荒垣や 守れども はれ 守れども

出でて我寝ぬや 出でて我寝ぬや 関の荒垣 藤15 ①

かはづ鳴く井手の山吹ちにけり花の盛りにあはましものを

胡7

かは虫は声もたへぬに蟬の羽のいと薄き身も苦しげに鳴く 常

2

甲斐が根をねごし山ごし吹く風を人にもがもやことづてやらむ

関1 ②

かひすらも妹背ぞなべてある物をうつし人にて我ひとりぬる

霧72

かひなしと思ひなけちそ水茎の跡ぞちとせのかたみともなる

幻41 ②

卵のうちに命こめたる雁のこは君がやどにてかへらざらん

真38 ①・橘4

帰るかり雲路にまどふ声すなり饑ふきとけこのめ春かせ 椎4

帰るさの道やは変るかはらねど解くるに惑ふ今朝の泡雪 霧7

①・20・総37

かは鳥のまなくしばなく春の野の草のね繁き恋もするかな 菜

上77 ③・宿75 ①

神かけて君はあらがふたれかさはよるべにたまる水といひける

幻25 ④

神垣のみ室の山の榊葉は神のみまへにしげりあひにけり 賢8

⑤

神さびのふるえにたまる雨水のみくさゐるまで妹を見ぬかも

幻 25 ⑥

神無月いつも時雨は悲しきを子恋ひの森はいかゞ見るらん ⑤

38 ②

神無月いつも時雨はふりしかどかく袖ひづる折はなかりき 葵

45・紅 38 ①・総 67 ②

神無月風に紅葉の散る時はそこはかとなく物ぞ悲しき 柏 10

神無月時雨ふるにもくるゝ日を君待つ程は長しとぞ思ふ 玉 4

神なびの岩瀬の森の呼び鳥いたくななきそ我が恋まさる 早 9

③

神なびのみ室のきしやくづるらむ立田の川の水の濁れる 椎 36

神山の身を卵の花のほととぎすくやし／＼と音をのみぞ泣く

宿 38 ②

神代より思むといふなる梅雨の此方に人を見る由もがな 螢 2

②

神樹にも手は触るとふをうつたへに人妻と言へば触れぬものか

も 蘭 4 ②

神名火に神簀立てて奈へども人の心は守りあへずも 椎 44

亀山にいく葉のみありければとむむるかたもなき別れかな 桐

15 ①

加茂川の瀬にふす鮎のいを取りて寝てこそ明かせ夢に見えつや

常 1 ②

からごろも裾に取りつき泣く子らを置きてぞ来ぬや母なしにし

て 薄 11 ②

唐衣たつ日はきかじ朝露のおきてしゆけばけぬべき物を 葉下

52

唐衣ひもゆふぐれになるときはかへす／＼ぞ人は恋しき 行 17

②・蜻 9

韓亭能許の浦浪立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日は無し 玉

19

からもりが宿を見んとて玉鉾にめをつけんこそかたは人なれ

蓬 9 ②

狩衣心のうちにはさなくなとか乱れて物おもひする 霧 1

かりそめのゆきかひちとぞ思ひこし今は限りの門出なりけり

桐 14 ③・37・須 4・松 9・葉下 65

雁のくる横の朝きりはれずのみ思ひつきせぬ世の中のうさ 葵

55・松 14・橋 11・椎 16・30 ①・宿 59

香をとめて誰折らざらむ梅の花あやなし霞立ちな隠しそ 梅 7

①

香をとめてとふ人もあるやあやめ草あやしく駒のすさめざりけ

る 螢 9 ①

薫る香によそふるよりは郭公聞かばや同じ声やまさると 胡 23

③

き

消えはつる時しなれば越路なる白山の名は雪にぞ有りける

蓬 22 ③

消えやすき露の命にくらぶればげに滞る松の雪かな 椎 34 ②

聞くからにもゆる思ひは山城の岩田の杜になくよぶこ鳥 早 9

②

菊の露わかゆばかりに袖ぬれて花の主に千代は譲らむ 紅 6 ③
菊の花露と起き居ていざ折らむ濡れなば袖の香こそ匂はめ 帚

73

北山にたなびく雲の青雲の星離り行き月を離りて 若 1 ①
木にも非ず草にも非ぬ竹のよのはしに我が身は成りぬべらなり

紅 2

昨日こそ船出はせしか鯨魚取り比治奇の灘を今日見つるかも

玉 18 ①

昨日見し花の顔とてけさみればねてこそさらに色まさりけれ

若 23 ⑥

君があたり見つゝを居らむ伊駒山雲な隠しそ雨はふるとも 賢

20

君が植ゑし一むら薄虫の音の繁き野べともなりにけるかな 藤

27・柏 49・横 9

君が門今ぞ過ぎ行く出でて見よ恋する人のなれる姿を 朝 8・

菜下 34 ②

君がすむ宿の梢のゆくゝと隠るゝまでにかへりみしはや 蓬

21・真 19

君がためなでしもしるくこのたびのたむけの神となるぞうれし

き 蓬 19 ②

君がため春の野に出でゝ若菜つむわが衣でに雪は降りつゝ 菜

上 21・手 33

君が手をかれ行く秋の末にしも野飼に放つ馬ぞかなしき 夕 14

②

君が名の立つにとがなき身なりせばおほよそ人になしてみまし
や 葵 2

君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち歎げく息としらませ 明

60 ②

君が行く方においてふ涙川まづは袖にぞながるべらなる 須 16

①

君がゆくこしの白山しらねども雪のまにゝに跡は尋ねむ 蓬

22 ①

君が代は天の羽衣まれにきてなづともつきぬ岩はならなむ 澤

2

君来ずは形見にせむとわが二人植ゑし松の木君を待ち出でむ

藤 30 ①

君こそは闔へもいらじこ紫わがもとゆひに霜はおくとも 桐 64

②

君恋ふる心はそれに砕くるをなど数ならぬ我が身なるらむ 蓬

14 ②・霧 12 ③

君こふる心はちぎに砕くれど一つもうせぬ物にぞありける 霧

12 ①

君恋ふる涙のこほる冬の夜は心とけたるいやはねらるる 空 5

君しのお草にやつるゝふるさとはまつ虫の音ぞ悲しかりける

蓬 37

君と我いかなる事を契りけむ昔の世こそ知らまほしけれ 桐

4・42・賀 4・早 26

君とわれ妹せの山も秋くれば色変りぬる物にぞありける 蘭 12

①

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をもしる人ぞ知る 梅

6・紅1・橋3・37・早5②

君に逢はむその日をいつと松の木の花の苦のみだれてものをこそ思

へ 浮46②

君に恋ひしなえうらぶれわが居れば秋風吹きて月かたぶきぬ

明57③

君にだにゆかでへぬれば藤の花たそがれ時も知らずぞ有りける

藤5

君に見えむことやゆゝしき女郎花霧のまがきに立ちかくるらん

若54④

君によりよゝゝゝとよゝゝゝと音をのみぞ鳴くよゝゝゝ

ゝゝと 夕48

君により我が名は花にはる霞野にも山にも立ちみちにけり 若

27①

君まさで荒れたる宿の板間より月のもるにも袖はぬれけり 夕

28

君ませば物も思はず玉河の瀬に伏す鮎のやなほこりして 常1

③

君みずて程の古屋のひさしには逢ふ事なしの草ぞ生ひける 須

13①・真32

君やこし我やゆきけむ思はず夢か現かねてか醒めてか 明43

②

君やこむ我や行かむの十六夜に槇の板戸もさゝずねにけり 夕

33③

君をいかで思はん人に忘れせてとはぬはつらきものとしらせん

若30①

君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなむ 末26

③・明47①・竹27・浮45②

君を思ふ数にしとらばおやみなく降りそふ雨の脚は物かは 夕

57

君をのみ思ひかけこの玉櫛箭明け立つごとく恋ひぬ日はなし

行15

君をのみ思ひ越路の白山はいつかは雪のきゆるときある 蓬22

④

君を待つ松浦の浦の娘子らは常世の国の天娘子かも 須51①

君を惜む心の空に通へばや今日止るべき雨の降るらむ 賢52②

君惜しむ涙落ちそひこの河の汀まさりて流るべらなり 須29①

・明5①

きりぎりすいたくな鳴きそ秋の夜の長きおもひはわれぞまされ

る 帯64①

霧ふかき雲井の雁もわがごとやはれせずものの悲しかるらむ

少9

く

草深き霞の谷に影隠してる日のくれし今日にやはあらぬ 松

41・句1

草枕もみちむしろにかへたらば心をくだくものならましや 蜻

25

草も木も色変れどもわたつ海の波の花にぞ秋なかりける 胡6

②

草わけて立ち居る袖のうれしさにたへず涙の露ぞこぼるゝ竹

35 ①

くちなしの色に衣をそめしよりはで心に物をこそ思へ 真36

③

雲のゐる遠山鳥のよそにても有りとし聞けばわびつゝぞぬる

総34 ②

雲居にて相語らはぬ月だにもわが宿過ぎて行く時はなし 帚51

②

雲井にて遠山鳥のはつかにもありとしきかば恋ひつつもをらむ

総48 ①

雲居にて世を経る頃はさみだれぬ天の下にぞ生けるかひなき

橋8

雲居にも通ふ心のおくれねば別ると人に見ゆばかりなり 明49

雲居よりうちえの声を聞くなべにさしぐむばかり見ゆる月影

若20 ②

悔しくぞ汲みそめてける浅ければ袖のみぬるる山の井の水 若

38・葵11 ①

暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月 若

17・御14

倉部山暗しと名にはたてれども妹がりといはゞ夜も越えなむ

若40 ②

くらべこし振分髪も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき 菜上

23

栗原の姉羽の松の人ならば都のつとにいざと言はましを 玉16

②

苦しくも降りくる雨か三輪が崎さののわたりに家もあらなくに

東31

くるゝまは千歳を過ぐす心地してまづは誠に久しかりけり 夕

45 ①・御13 ①

くれたけの よゝのふること なかりせば 伊香保の沼の あ

りきてふ 人鷹こそは うれしけれ 身は下ながら このの

葉を 天つそらまで きこえあげ 末の世までの あとゝな

し 今もおほせの くだれるは 塵につげとや ちりの身に

つもれることを とはるらむ これを思へば いにしへも

薬けがせる けだものゝ 雲にほえけむ こゝちして ちゝ

の情も おもほえず 一つこゝろぞ ほこらしき かくはあ

れ共 てるひかり 近きまのりの 身なりしを たれかは秋

の くるかたに 欺き出でゝ みかきより 殿上もる身の

みかきもり をさゝしくも おもほえず こゝの重ねの

なかにては あらしの風も きかざりき 今は野やまし ち

かければ 春はかすみに たなびかれ なつはうつ蟬 なき

くらし 秋はしぐれに 身ながらに つもれる年を しるせ

れば 五つの六つに なりにけり 是にそはれる わたくし

の 老のかずさへ やよければ 身は賤しくて としたかき

ことの苦しさ かくしつゝ ながらの橋の ながらへて な

にはの浦に たつなみの 波のしわにや おほゝれむ さす

かに命をしければ こしの国なる しらやまの かしらは

白く なりぬとも おとはの滝の おとにきく 老す死なず
の くすりもが 君が八千代を わかえつゝ見む 帚7・葵

61・菜下9・椎19

紅に色をばかへて梅の花香ぞことごとくににははざりける 紅5

①

紅にそめし心も頼まれずひとをあくにはうつるてふなり 末32

②・40②

くれなゐの色こき花と見しかども人をあくにはうつるてふなり

末32①

紅の薄染衣浅らかに相見し人に恋ふる頃かも 空12①

紅のこそめの衣下にきて上にとりきばしるからむかも 賀29

紅のはつ花ぞめのいろふかく思ひしこゝろわれ忘れめや 蜻27

①

くれなゐの色よき花とみしかども人をあくにはうつろひにけり

末40②

黒髪に白髪交り老ゆるまでかかる恋にはいまだあはなくに 賀

20

け

けづりこし心もしるく玉かつらたむけの神になるぞうれしき

蓬19①

今日けふとわが待つ君は石川の月に交りてありといはずやも

蜻21

けふかともあすともしらぬ白菊のしらすいく世をふべき我が身

ぞ 横2

けふ桜雲に我が身いざぬれむ香こめに誘ふ風のこぬまに 句6

①

今日過ぎばしなましものを夢にても何処をはかと君がとはまし

花5①・浮54①

けふそくをおさへてまさへ万世に花のさかりを心しづかに 柏

32

今日そへに暮れざらめやはと思へども堪へぬは人の心なりけり

帚18②

今日だにも初音きかせようぐひすの音せぬ里は住むかひもなし

初13①

今日のみと春を思はぬ時だにもたつことやすき花の蔭かは 松

21・菜上52・菜下5

けふみれば玉のうてなもなかりけりあやめの草の庵のみして

橘33①

けふもまた午のかひこそ吹きつなれ羊の歩み近づきぬらむ 浮

53①

けふよりは露のいのちもをしからず蓮の上の玉と契れば 鈴1

①・橘13①

今日よりや天の河原はあせなゝむ底ひともなくただ渡りなむ

桐64①・賢25

二

こえにける波をばしらで末の松ちよまでとのみ頼みけるかな

浮45①

苔生ふる岩に千代ふるいのちをば夢なる泉の水ぞ知るらん 螢

14①

ここだくに思ひけかもしたへの枕片去る夢に見えける 菜

上34

こゝにしも何句ふらむ女郎花人の物いひさがにくき世に 桐

9・帚1・夕72・散11・明45・霧21・69・浮1・18・手9

こゝにだに光りさやけき秋の月雲の上こそ思ひやらるれ 鈴4

ここのみめづらしと見る雪の山所々にふりにけるかな 朝27

九里の内だにあかき月影に荒れたる宿をおもひやるかな 桐53

心あてに折らばやをらむ初霜の置きまどはせる白菊の花 帚

11・夕12

心ありてとふにはあらず世の中にありやなしのきかまほしき

ぞ 浮15

心がへするものにもが片恋は苦しきものと人にしらせむ 総80

②

心からうきたる船に乗り初めて一日も波にぬれぬ日ぞなき 早

25

心から花の雪にそぼちつゝうくはずとのみ鳥の鳴くらむ 明

3・蓬30

心こそ心をはかる心なれ心のあたはこゝろなりけり 賢34

心さへ空にみだれぬ秋の夜にあかき山の霧はらふ風 真15②

心さへ奉れる君に何をかも言はず言ひしとわがぬすまはむ 末

18①

心には下行く水のわきかへり言はで思ふぞいふにまされる 末

14・横19・東23①・浮16

心には千重に思へど人にいはぬ我が恋ひ妻を見むよしもがな

霧31①

情にはゆるぶことなくすがの山すがなくのみや恋ひ渡りなむ

桐22①

心にもあらぬ我が身のゆきかへり道の空にて消えぬべきかな

夕54③

心にもかなはざりける命もて頼みも置かず常ならぬ身は 菜上

15③

こころみに猶おりたゝむ涙川うれしきせにも流れあふやと 葵

26②・早28①・蜻26②

試みにほかの月をも見てしがな我が宿からの哀なるかと 鈴9

梢のみあはと見えつゝ帚木の本を本より見る人ぞなき 明19④

こちたくはかもかも為むを石代の野辺の下草われし刈りてば

葵16④

こちといへばおぼろふなりし風にいでつけては問はむあたら名

立てよ 柏16

こち吹かは匂ひおこせよ梅の花主なしとてはるを忘るな 真18

③・幻11①・紅6②

事しあらば小泊瀬山の石城にも隠らばともにな思ひわが夫 須

10 ②

こと繁き心よりさく物思ひの花の枝をやつら杖につく 帚 36

②・葵 40 ①

今年行く新島守が麻衣肩のまよひは誰か取り見む 少 3 ①

こと問はぬ木にもありとも我がせこが手馴れのみことつちに置

かめやも 横 18

琴取れば歎き先立つけだしくも琴の下樋に濡やこもれる 横 10

こと夏はいかゞ鳴きけむ時鳥この宵ばかりあやしきぞなき 初

17

ことならば思はずとやはいひ果てぬなぞ世のなかの玉だすきな

る 末 13 ①・菜下 2

ことならば山下水となりなむ人め茂きの中も行くべく 橋 22

ことにいでゝいはぬばかりぞ水瀬川下に通ひて恋しき物を 桐

11 ③・常 31 ②

言にいでて言はばゆゆしみあさがほのはには咲きでぬ恋もする

かな 桐 11 ①

言に言でていはばゆゆしみ山川のたぎつ心は塞きあへにけり

桐 11 ②・38 ③・蜻 14

言にいへば耳にたやすし少くも心のうちにわが思はなくに 常

11

琴の音に峯の松風かよふらしいづれの緒よりしらべそめけむ

賢 5・明 23 ①・松 16・常 13 ①・橋 38 ①

琴の音を聞き知る人のありければ今ぞ立ち出でて緒をもすぐへ

き 末 4・横 15

言の葉はなげなる物といひながら思はぬ為は君もしるらむ 若

47 ②

ことのはをなげなる物と思ひせば何かは人のつらくしも有らむ

若 47 ④

ことわりと思ひ続けてながむればつらきも人の哀とぞ思ふ 竹

21 ③

こともつき程はなけれど片時も問はぬはつらき物にざりける

若 30 ④

こぬ人をしたに待ちつゝ久方の月を哀といはぬよぞなき 末 6

こぬ人を松のえに降る白雪の消えこそ返れくゆる思ひに 関 16

このたびは幣もとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまにゝ 夕

68 ①

子のために残す命もへてしがな老て先立つ否びざるべく 関 8

②

この殿は 宜も 宜も富みけり 三枝の あはれ 三枝のは

れ 三枝の 三つば四つばの中に 殿づくりせりや 殿づく

りせりや 初 20・竹 7・32・早 30

木の間よりもくる月のかげ見れば心づくしの秋は来にけり

夕 19 ①・須 44・菜下 39・宿 39

このめはる春の山田を打ち返し思ひやみにし人ぞこひしき 空

6 ②

このゆふべ降り来る雨は彦星の早漕ぐ船の櫂の散沫かも 須 24

①

この世にて菩提のたねをまきつれば君がひくべき身とぞなりぬ
る 菜上72②

此の世をばおひもかつぎて渡してむ後は始の人を尋ねよ 真2

③

この世をも後をもいかにいかにせん燃えむ煙のむすばれつゝ

柏6②

この岡に草刈る小子^{わらわ}然な刈そね在りつも君が来まさば御馬草

にせむ 椎42②

この折れる桜の散らで残れるは荒き風にも当てずやありけむ

桐48②・野14①

恋しきに命をかふる物ならば死には安くぞあるべかりける 葵

51②・霧46②

恋しきに死ぬるものとは聞かねども世のためしにもなりぬべき

かな 藤14①

恋しきはうき世のつねになりゆくを心は猶ぞ物思ひける 柏37

こひしきも思ひこめつゝあるものを人にしらるゝ涙になりに

菜下40⑤

恋しきも心づからのわざなればおきどころなくもてぞ煩ふ 朝

18②

恋しきをなにつけてか慰めむ夢だに見えずぬる夜なければ

帚93①・蜻2②

恋しくは影をだにみて慰めよ我が打ち解けて忍ぶ顔なり 霧71

①

恋しくは来ても見よかし千早振神のいさむる道ならなくに 絵

2・朝4①・浮2

恋しくは来ても見よかし人づてに岩瀬の森のよぶこ鳥かも 早

9①

恋しさに身を投げつべし慰むることに従ふ心ならねば 菜上53

①

恋しさの限りだにある世なりせば年へて物は思はざらまし 賀

24②・柏52・横14・宿50

恋しさは同じ心にあらずとも今宵の月を君見ざらめや 末16

恋しとはたが名づけけむ事ならむ死ぬとぞ唯にいふべかりける

浮6

恋しとも今はおもはず魂の逢ひ見ぬさきになくなりぬれば 霧

70②

恋しともまだ見ぬ人のいひ難み心にももの歎かしきかな 明34

①・35

恋ひ死なばたが名はたゝじ世の中の常なきものと言ひはなすと

も 菜下33・鈴11・霧78②・竹24

恋ひ死なむ後は何せむ生ける日のためこそ人は見まくほしけれ

須43①・浮5

恋すてふ狭山の池のみくりこそ引けば絶えすれ我やねたゆる

玉32③

恋するは苦しき物としらすべく人を我が身にしばしなさばや

総80③

恋すれば我が身は影となりにけりさりとて人にそはぬものゆゑ

総74

恋せじとねをのみなけばしきたへの枕の下に海人ぞ釣する 宿

31

恋せじと御手洗川にせし稷神はうけずぞなりにけらしも 葵

4・賢31・朝7②・宿52・浮42・東11

恋せじのみそぎは神もつけずとか人を忘るる罪深しとて 朝7

①

恋はみなさまざま有りと聞くなべに己がじゝとぞ音は泣かれける 帚9⑤

恋わびて死めてふ事はまだなきを世のためしにもなりぬべきかな 桐2・朝19

な

恋わびてへじとぞ思ふ世の中にあらぬ所やいつこなるらん 東

28②

恋わびてよるく惑ふ我が玉はなかく身にもかへらざりけり

柏12③

こひわびぬ太田の松のおほかたは色に出でてや逢はむといはまし 胡26①

し

恋わびぬねをだになかむ声たてていつこなるらむ音なしの流

行1②・霧63・宿51

こふるまに年のくれなば亡き人の別れやいと遠くなりなむ

須9

こふれども逢ふ夜のなきは忘草夢路にさへやおひ茂るらむ 須

32

蟋蟀の待ち歎ぶる秋の夜を寝るしなし枕とわれは 野12

9⑤

駒なべてすさめぬ沢の菖蒲草けふに逢はずは猶や刈らまし 螢

駒にこそまかせたりけれあやなくも心のくると思ひけるかな

橘21②

こま笛の駒に我が乗り慰めむみきともいはじあなにくけれど

末8

こむ世にも早なりなくむめの前につれなき人を昔と思はむ 菜

下41

こめやとは思ふものからひぐらしの鳴く夕暮は立ちまたれつつ

菜下53

隠口の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかもあらむ 夕33

④

こよ無くてけふは涼しき袂よりあふぐ風さへ秋になりつつ 桐

59

今夜の早く明けなばすべを無み秋の百夜を願ひつるかも 明44

②

こりすまにまたもなき名は立ちぬべし人にくからぬ世にし住ま

へば

夕65①・末2・須30②・澤13①・菜上53②・柏8・総

57・宿25

こりすまの浦の白波立ち出でゝ寄る程もなくかへるばかりか

若49③

これもみなさぞなむかしの契りぞとおもふ物からあさましきか

な

これをだに形見と思ふを都には葉がへやしつる椎柴の袖 明28

菜下7

是をみよ人もすさめぬ恋すとして音を泣く虫のなれる姿を 菜下

34①

更衣^{ころも}せむや さきむだちや 我が衣^{きぬ}は 野原 篠原 萩の花摺
や さきむだちや 少6

衣だに中にありしはうとかりき逢はぬ夜をさへ隔てつるかな

末 36・少12②・宿46①

衣手に取りとどこほり泣く児にもまされるわれを置きて如何に

せむ 薄11①

声たてゝ鳴きぞしぬべき秋霧に友惑はせる鹿にはあらねど 椎

25①

声をだにきかで別るゝ魂よりもなき床にねむ君ぞ悲しき 葵

53・御1・15・橋42

さ

柳葉にゆふしでかけてたが世にか神のみ前に祝ひそめけむ 賢

15②

さかき葉の香をかぐはしりとめくれば八十氏人ぞまどゐせりけ

る 賢10③

柳葉の春さす枝のあまたあればとがむる神もあらじとぞ思ふ

賢10①

逆さまに年もゆかなむ取りもあへず過ぐる齡やともに返ると

菜下63

賢^{さか}しむと物いふよりは酒飲みて酔泣きするしまさりたるらし

藤8①・菜下62①

さかしらに夏は人まね笹の葉のさやぐ霜夜をわが独りぬる 若

13①・関10①・玉41・螢16・行20①・紅10・総26

さかの山みゆき絶えにし芹川の千世のふる道跡はありけり 行

3

さきだゝぬ悔の八千度悲しきは流るゝ水の帰りこぬなり 早20

②

さきにたつ涙のみににさそはれてうらみのたびに思ひけるかな

早20①

咲く花の下に隠るゝ人おほみありしにまさる藤の蔭かも 花13

咲く花も人の心も長閑なる春としりせば春をまたまし 少28③

さくら色に衣は深く染めてきむ花のちりなむ後の形見に 竹

14・手8①

桜咲く桜の山の桜花咲く桜あれば散る桜あり 竹12①・椎2

桜田へ鶴鳴き渡るあゆち潟潮干にけらし鶴鳴き渡る 薄12②

桜花今宵かざしにさしながらかくて千年の春をこそへめ 花

1・初9②

桜花ちりかひ曇れ老いらくのこむといふなる道まがふがに 藤

24・竹12②

桜花露にぬれたるかほ見ればなきてわかれし人ぞ恋しき 若23

③

桜花匂ふ物からつゆけきは木のもも物をおもふなるべし 空6

①

桜花春の常にやなりぬらん咲き初めしより色のかはらぬ 早4

④

桜人 その船ちちめ 鳥つ田を 十町つくれる 見て帰り来む

や そよや 明日帰り来む そよや 言をこそ 明日ともい

はめ 遠方に 妻さる夫は 明日もさね来じや そよや
明日もさねこじや そよや 薄12①・少24・椎5

桜よる優る花なき春なればあだし草木を物とやはみる 菜下

22・紅8

咲けばちる咲かねば恋し山桜おもひたえせぬ花の上かな 野8

①

小竹が葉のさやぐ霜夜に七重かる衣に益せる子ろがはだはも

初27③

さざ波や志賀の浦風いかばかり心の内のすゞしかるらむ 橋27

さざ波や志賀の山路へつゞら折くる人絶えて枯やしぬらむ 若

1②・4

ささの隈ひのくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む 葵

3・椎24①

笹の葉におく霜よりも独りぬるわが衣手ぞさえまさりける 蘭

15①

笹の葉におく初霜のよを寒みしみはつくとも色に出でめや 手

22

小竹の葉はみ山もさやに乱るともわれは妹思ふ別れ来ぬれば

野21

さざれ石の中に思ひはありながらうち出づることのかたくもあ

るかな 胡12①・常24

ささわけば荒れこそ増さめ草枯れの駒なつくべきものの下かは

賀19

挿櫛は 十まり七つ ありしかど たけくの掾の 朝に取り

夜さり取り 取りしかば 挿櫛もなしや さきむだちや 絵

1①

指進の栗栖の小野の萩の花散らむ時にし行きて手向けむ 霧10

②

さしながら人の心をみ熊野の浦の浜ゆふいくへなるらむ 菜上

10②

さしなべに湯沸かせ子ども櫓津の櫓橋より来む狐に浴むさむ

夕27①

さし焼かむ 少屋の醜屋に かき棄てむ 破薦を敷きて うち

折らむ 醜の醜手を さし交へて 宿なむ君ゆゑ あかねさ

す 昼はしみにらに ぬばたまの 夜はすがらに この床の

ひしと鳴るまで 歎きつるかも 夕43

さす草も萌えぬらんやぞ春きては若菜摘むべきふちかたの山

初21

さす棹の檣にぬるる袖ゆゑに身さへ浮きても思ほゆるかな 橋

35

定めなき世を聞く時の涙こそ袖の上なる淵瀬なりけれ 薄16

さつきまつはな橘の香をかけば昔の人の袖の香ぞする 散9

⑤・少26・胡22・23①・菜下23②・幻31②・早16・浮26・蜻

10・13①

里遠みいかにせよとかかくのみはしばしも見ねば恋しかるらむ

松28①

里遠みうらぶれにけりませ鏡床のへさらず夢に見えこそ 松28

③

さとならで弓はりながら入る月は山の端にだに立ちとまらなん
花10②

里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる

夕36・蓬8・宿10

里はみな散りはてにしを足引の山の桜はまださかりなり 若2

②

里人のことは夏野の茂くともかれゆく君にあはざらめやは 朝

9

里人もかたり継ぐがねよしゑやし恋ひても死なむ誰が名ならめ

や 霧78③

佐保河に凍り渡れる薄氷のうすき心をわが思はなくに 賢57

棹させど深さもしらぬ藤なれば色をも人もしらじとぞ思ふ 菜

上53④

さまざまに思ふころはあるものをおしひたすらにぬるる袖か

な 東22

五月雨にぬれにし袖にいとどしく露置き添ふる秋のわびしき

桐43①

さみだれにもの思ひをればほとときす夜ふかく鳴きていづち行

くらむ 螢5

五月雨の夜ごとになきつゝ郭公袖のひるまもなきぞ悲しき 横

5

さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむ宇治のはし姫

橋34①・総44②・浮22

さもこそは夜半のあらしの寒からめあなはしたなの真木の板戸

や 桐3

さもこそはよるべの水に影たえめかけしあふひを忘るべしやは

幻25⑤

さやかにも今朝は見えずや女郎花露のまがきにたち隠れつゝ

若54⑥

小夜深み帰りし空もなかりしをいつこより置く露にかあるらん

菜下40⑥

さらばよと別れし時にいまはせば我も涙におぼゝれなまし 真

13・橋29

し

志賀のあまの塩焼き衣なれぬれど恋といふものは忘れかねつも

朝12⑤

鹿の住む尾上の萩の下葉より枯れ行く野辺も哀とぞ見る 椎21

志賀の山いたくな伐りそ荒雄らがよすがの山と見つゝ偲ばむ

帚34①

しかばかり契りしものを渡り川帰る程には忘るべしやは 葵25

しかりとて背かれなくに事しあれば先づ歎かれぬあなう世の中

賀28②

敷島の 日本やまとの国に 人多おほに 満ちてあれども 藤波の 思ひ

纏まとはり 若草の 思ひつきにし 君が目に 恋ひや明かさむ

長きこの夜を 帚67

しきたへの枕をまきて妹と吾ぬる夜は無くて年ぞ経にける 帚

93②

しぐれつゝかれゆく野辺の花なれど霜の籬に匂ふ色かな 宿2

①

しぐれつゝ梢々にうつるとも露に後れし秋な忘れそ 末1①

時雨降る曉月夜紐解かず恋ふらむ君と居らましものを 賢30

下にのみ恋ふれば苦し山の端に出て来る月のあらはれはいかに

末11

下の帯の道はかたがた別るとも行きめぐりても逢はむとぞ思ふ

須2①

下紐のしるしとするも解けなくに語るがことはあらずもあるか

な 桐44②

下紅葉するをばしらで松の木のうちへの緑を頼みけるかな 菜下

11②

死出の山越えてきつらむ時鳥恋しきひとのうへ語らなむ 幻42

②・蜻12②

しでの山麓を見てぞかへりにしつらき人よりまつこえじとて

桐14①・幻42①

しどけなきねくたれ髪をみせじとやはた隠れたるけさのあさが

ほ 松29

しなてるや片岡山にいひに飢ゑてふせる旅人あはれ親なし 朝

13・玉38・椎45①

しなてるや鳩の湖にこぐ舟のまほにもいもにあひ見てしがな

早32

死ぬといはばためしにもせむ物をのみ思ふ命は君がまに／＼

螢14②

死ぬとてもとりもあへずはやはらるゝいといきがたき心地こそ

すれ 桐15④・霧9

しのゝめの空きり渡りいつしかに秋の景色に世はなりにけり

若52・葵36④

しのゝめのほがらく／＼と明けゆけばおのが衣／＼なるぞ悲しき

浮13

忍ぶれど色に出にけりわが恋は物や思ふと人のとふまで 胡26

③・霧53

柴のいほり苔の衣に身をやつし松のはならぬときはなしとか

総9②

しほがまの浦にはあまや絶えにけむなどすなどりの見ゆる時な

き 橘10

しほがまの前に浮きたる浮島の浮きて思ひのある世なりけり

東7②

しほのまにあさりするあまも己がよ／＼かひありとこそ思ふべら

なれ 須39①

潮のまによもの浦々求むれば今はわが身のいふかひもなし 須

39②

潮みたぬ海ときけばやよとともにみるめなくして年のへぬらん

関6

しほみては入りぬるいその草なれやみらく少なく恋ふらくの多

き 賀14

しめのうちに花の匂ひを鈴虫の音にのみやは聞きふるすべき

絵5

霜枯れの草のゆかりぞあはれなるこまがへりても懷けてしがな
玉30 ②

霜枯の野辺をしようしと思へばや垣はの草と人のあるらん 御21

霜枯の蓬の門にさしこもりけふの日影をみぬぞわびしき 総73

下毛野安蘇の河原よ石踏まず空ゆと来ぬよ汝が心告れ 夕56

④・葵23 ④

霜のたて露のぬきこそ弱からし山の錦のおればかつちる 松35

霜八度おけどかれせぬ榊葉のたち栄ゆべき神のきねかも 賢7

④

白川のしらずともいはじ底清み流れてよくにすまむと思へば

常6 ②

新羅へか家にか帰る菅岐の島行かむたどきも思ひかねつも 蜻

24

白雲と見ゆる桜も有るものをおよばぬ枝と思はざらなむ 菜上

83

白雲にはねうちかはしとふ雁の数さへみゆる秋のよの月 横16

①

白雲のかゝる岡辺のすみかには晴れずや霧の立ちわたるべき

桜5

白雲のかゝるそらごとする人を山のおもとよせてけるかな

浮50 ③

白雲の九重にしも立ちつるは大内山といへばなりけり 葵46

白雲のたえずたなびく峯にだにすめば住みぬる世にこそありけ

れ 松30 ①・浮40 ①

白雲のはれぬ雲ゐにまじりなばいづれかそれと君はたづねむ

浮37 ②

しら雲の八重たつ山にこもるとも思ひ立ちなばたづねざらめや

浮40 ②

白雲のやへにかさなるをちにても思はむ人に心へだつな 橋31

①

白玉か何ぞと人の問ひし時露とこたへて消なまし物を 菜下

35・総75・蜻3

白露に風のふきしく秋の野は貫ぬきとめぬ玉ぞちりける 野6

②

白露の消えにし人の秋まつと常世の雁も鳴きて飛びけり 幻23

②

白露はうつしなりけり水鳥の音羽の山の色づくみれば 菜上59

①

白波のよするなぎさによをすぐす海人の子なればやどもさだめ

す 夕38 ①

白波は立ち騒ぐともこりずまの浦のみるめは刈らむとぞ思ふ

須30 ①・滞13 ②

白波もたつ日たゝぬ日あるものを市に市女のたゝぬ日ぞなき

玉34

しらぬひの筑紫の綿は身につけてまだき着ねども暖にみゆ 末

25 ②・野19・椎15

知らねども武蔵野といへばかたれぬよしやさこそは紫のゆゑ

若60 ①・62 ②・朝28 ①・常4・29

白雪の色わきがたき梅が枝に友待つ雪ぞ消え残りたる 菜上39

②・浮23

白雪のふりてつもれる山里はすむ人さへや思ひきゆらむ 手30
知るしらぬ何かあやなく分けていはむ思ひのみこそ知るべなり
けれ 帚83①

しるべする雲の舟だになかりせば世を海中に誰か問はまし 宿

54

白妙の妹がころもに梅の花色をも香をもわきぞかねつる 朝1

②

しろたへの袖別るべき日を近み心にむせびねのみし泣かゆ 明

52・薄19

す

すぐれてふけ井の浦にありし石はおひの波にぞあらはれにけ
る 真39

菅原や伏見の里の荒れしより通ひし人のあともたえにき 早10

①

過ぎにしも今行く末もふた道になべて別れのなき世なりせば

夕71①

鈴鹿川 八十瀬の滝を みな人の 賞づるも著く 時にあへる

時にあへるかも 賢17①・19②

鈴鹿河八十瀬渡りて誰故か夜越えに越えむ妻もあらなくに 賢

17②・19①

鈴が音の早馬うまやのつつみ井の水をたまへな妹がただ手よ

初32

鈴鹿山伊勢をの海人のすて衣しほなれたりと人やみるらむ 空

9・蓬18

涼しさはいきの松原まさるともそふる扇の風なわすれそ 夕67

鈴虫の声乱れたる秋の野はふりすて難き物にぞありける 鈴3

須磨の海人の塩焼衣の馴れなばか一日も君を忘れて思はむ 朝

12④

須磨の海人の塩焼き衣ぎよの藤衣間違にしあればいまだ着なれず

朝12③

須磨のあまの塩焼き衣なれゆけばうとくのみこそなりまさりけ

れ 朝12②

須磨の海人のしほ焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

須7③・30③・55①・明50・薄7・真30・霧66・浮44②

須磨のあまをしるべと思へば渡つ海のそのみるめはうたがひ

もなし 若9③

須磨の浦にあさりするあまの大方はかひあるよと思ふべらな

る 須39③・61②

すまの浦をけふ過ぎ行けどこし方へ帰る波にやことをつてまし

明58

曇染めの君が袂はくもなれやたえずなみだの雨とのみふる 幻

9

曇染の鞍馬の山にいる人はたどるくもかへりきなく 若40

①

墨染の衣の袖はくもなれやなみだの雨のたえず降るらむ 葵 39

②

すみぞめのたそがれ時の臘夜にありこし君にさやにあひ見つ

明 7 ①

住吉の 大倉向きて 飛ばばこそ 速鳥と云はめ 何か速鳥

明 14

住吉の小集案に出でてうつつにもおの妻すらを鏡と見つも 霧

33

住吉とあまはつぐともながるすな人忘れ草おふといふなり 蘭

14

住吉のきしもせざらむ物故に妬くや人に待つといはれむ 蓬 35

住みわびぬ今は限りと山里に身を隠すべき宿求めてむ 夕 59

住みわびぬ我が身投げてむ津の国の生田の川は名のみなりけり

浮 47 ①

巢守にと思ふ心は留むれどかひあるべくもなしとこそ聞け 橘

6 ②

駿河なるたこの浦波たゝぬ日はあれども君を恋ひぬ日はなし

常 32 ①

末の露もとの雫や世の中の後れ先だつためしなるらむ 葵 52・

柏 19・23・38 ②・御 11 ③・20・桂 32・宿 56

せ

関こえて粟津の森のあはずとも清水に見えしかげを忘るな 関

5 ①

関山の峯の杉村過ぎ行けどあふみは猶ぞはるけかりける 関 4
背の山に直に向かへる妹の山事許せやも打橋渡す 夕 21・蘭 12

③

蟬の羽のよるの衣はうすけれど移り香こくも匂ひぬるかな 梅

4

せり摘みし昔の人も我ごとや心に物のかなはざりけん 真 25・

菜上 78

千歳 千歳 千歳や 千歳や 千歳の 千歳や 万歳 万歳

万歳や 万歳や 万代の 万歳や 菜下 15

そ

底清きにひだの池の水の面はくもりなき世の鏡とぞ見る 常 6

①

そこひなき淵やは騒ぐ山川の浅き瀬にこそあだ波はたて 玉 39

①・胡 24 ①・霧 77 ③

袖の浦なみふきかへす秋風に雲の上まですゞしからなむ 早 24

①

そのかみのいもひの庭に余れりし草の薙も今日や布くらむ 若

12 ①

その駒ぞや 我に 我に草乞ふ 草は取り飼はむ 水は取り

草は取り飼はむや 霧 10 ①・螢 9 ③

園原や伏屋に生ふる帚木のありとは見えて逢はぬ君かな 帚 94

①

そへにととすればかかりかくすればあないひ知らずあふさき
るさに 帚18①

そむきぬるうしろでよりも極楽に向かはむ君が顔をこそ思へ

総41②

そむくとして雲にはのらぬものなれど世の憂き事ぞよそになるて

ふ 総20

空めをぞ君は御手洗川の水浅しやふかしそれはわれかは 夕37

空を飛ぶ天の羽衣えてしがな浮き世の中にうちもとどめじ 浮

54②

それをだに思ふこととて我が宿を見きとないひそ人のきかくに

帚88

た

たえやせむ命ぞしらぬ水無瀬川よし流れても心みよきみ 蓬20

③

高き屋に登りてみれば煙たつたみのかまどは賑ひにけり 帚

14・玉25

高砂の さいささごの 高砂の 尾上に立てる 白玉 玉椿 玉

柳 それもがと さむ 汝もがと 汝もがと 練結染緒の

御衣架にせむ 玉柳 何しかも さ 何しかも 何しかも

心もまたいけむ 百合花の さ百合花の 今朝咲いたる 初

花に あはましものを さゆり花の 賢60・61①・梅9・蜻

27②

たが里の春のたよりに鶯のかすみにとづる宿をとふらむ 初15

②

高田の野辺の容花面影に見えつつ妹は忘れかねつも 真37③

薪こる事は昨日につきにしをいざ斧のえはここにきたさむ 胡

5③・御4②

滝つせにうき草の根はとめつとも人の心をいかゞ頼まむ 蘭10

②

滝つせにねざしとどめぬ浮草のうきたる恋も我はするかな 帚

13

滝つせの中にも淀はありてふをなど我が恋の淵瀬ともなき 若

15・初24②

滝の音は絶えて久しく成りぬれど名こそ流れて猶聞こえけり

松2①

たき物の木の下煙ふすぶとも我独りをばしなすまじやは 真12

竹河の 橋のつめなるや 橋のつめなるや 花園に はれ 花

園に 我をば放てや 我をば放てや 少女伴へて 初33・真

24・竹8・11②・29

たと思ふ人のかたみにいかになどみなはらわたのたゆる声なり

霧52

ただここに君きまさぬかすみぞめのたそがれ時に其の姿みむ

明7②

たたための花のごと かい練好むや げに紫の色好むや 末35

②

立ち返りあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつ白波 竹21
①

立ち返り又や分けまし面影をみかきが原の忘れがたさに 菜上

79 ②

立ちて思ひるてもぞ思ふ紅の赤裳たれひきいにし姿を 賀1

①・真35 ①

たちて行く行ゑも知らずかくのみぞ道の空にてまどふべらなる

夕54 ①

立ちてゐてたときも知らに思へども妹に告げねば間使も来ず

賀1 ②

立ちて居るたときも知らにわが心天つ空なりつちは踏めども

夕56 ①・賀1 ④・葵23 ①

橘の寺の長屋にわがる宿し童女放髪は髪あげつらむか 夕20

橘の花散る里に通ひなば山霞公鳥とよもさむかも 散9 ②

たちはなの花散る里の郭公片恋し一つなく日しぞ多き 散5

①・7

橘は実さへ花さへその葉さへ枝に藉ふれましてときは木 胡23

②・菜下23 ②・浮25

立ち寄らば影踏むばかり近けれど誰かなこそ其の関をすゑけむ

常28 ①

鶴が鳴き葦辺をさして飛び渡るあなたづたつし独りさ宿れば

須66

竜田川もみちみだれて流るめりわたらば錦中やたえなむ 帚48

②

尋ねても今こそみつれ千早振みやまの奥の石のおましを 蜻19

②

たとへてもはかなきものは世の中のあるかなきかの身にこそ有

りけれ 蜻36 ①

たなばたの天のと渡る今宵さへをち方人のつれなかるらむ 総

52

谷の戸をとぢやはてつる鶯のまつに声せで春も過ぎぬる 初13

②・15 ①

種しあれば岩にも松は生ひにけり恋をし恋ひばあはざらめやは

明40 ②・桜2

種無くてなき物草はおひにけりまくてふ事は有らじとぞ思ふ

東18 ③

頼むるに命の延ぶる物ならば千歳もかくてあらむと思ふ 御

13 ②

頼めくる君しつらくはよもの海に身も投げつべき心ちこそすれ

総25

頼めつゝ別れし人を待つ程に年さへせめて恨めしきかな 菜下

59

旅人はたもと涼しくなりにけり関吹き越ゆる須磨の浦風 須45

②

玉かつら懸けぬ時無く恋ふれどもいかに妹に逢ふ時も無き

玉37 ②

玉かつらたえぬものからあら玉の年の渡りはたゞひと夜のみ

松46 ②

玉葛花のみ咲きて成らざるは誰が恋ひにあらめ吾は恋ひ思ふを

総22②

玉葛実ならぬ樹にはちはやぶる神を着つとふならぬ樹ごとに

総22①

珠衣たまきのさるさゝしづみ家の妹にもの言はず来て思ひかねつも

葵30①

たまさかにゆきあふみなるいさら川いさと答へてわが名もらす

な 朝20②

玉笹の葉わきに置ける白露の今いく世へむ我ならなくに 蘭15

②

玉島のこの川上に家はあれど君を恥しやまみ顔はさずありき 真5

①

玉簾の明くるも知らで寝しものを夢にも見じと思ひけるかな

桐47②・54・藤16・東21

玉だすきかけぬ時なしわが恋は時雨し降らば濡れつつも行かむ

薄10②

玉だすきかけねば苦しかけたればあな煩はし人の心や 末13②

玉垂の 小瓶を中に据ゑて 主はも や 魚求きに 魚取りに

こゆるぎの 磯の若藻 刈り上げに 帚77

玉に貫き消たず賜らむ秋萩の末わら葉に置ける白露 螢1

魂は見つ主は誰とも知らぬども結びとどめよしたがひのつま

葵20②・柏12②

たまはこの道かゝるなりし君なればあとはかなくなると知らず

や 明4

玉藻かるあまにはあらねど渡津海の底ひもしらず入る心かな

胡24③

手向にはつゞりの袖もきるべきに紅葉に飽ける神や返さむ 澤

15

ためしにも人のひくべきあやめぐさこのさみだれを今もあへな

ん 螢2④

徘徊り往實やまもとの里に妹を置きて心空なり土は踏めども 夕56③・

葵23③・霧17・宿16

垂乳根の親のいさめしうたた寝はもの思ふ時のわざにぞありけ

る 常19・総63・浮33②

たらちねの親のかふこのまゆごもりいぶせくもあるか妹に逢は

ずて 常15・浮33①

たらちねの親もつらしなかくばかり思ひに迷ふ世にとどめたる

霧65①

たらちねの母が手放れかくばかりすべなき事はいまだせなくに

薄4

たらちねはかかれとてしもうば玉のわが黒髪をなですやありけ

む 手26

誰とてかあれたる宿といひながら月よりほかの人をいるべき

夕2

誰ならむいはでの森にこととはむしめの外にて我が名借りけむ

賢6

たれならむはかなながらぞ頼まるゝかくてもつひにやまじと思

へば 空1

誰により松をもひかむ鶯の初音かひなきけふにもあるかな 蜻 32

たれをかもしる人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに 松 32・

蜻 34

誰をかもまつちの山の女郎花秋と契れる人ぞあるらし 手 11

②・13

ち

誓ひつることのあまたになりぬれば千千の社も耳馴れぬらむ

総 79 ①

契りありてこの世にまたもうまるとも面変りしてみもや忘れむ

霧 28

ちぎりけむ心ぞつらきたちはなの年にひと度あふはあふかは

東 4 ②

千年まで限れる松もけふよりは君にひかれて万代やへむ 初 9

⑤

ちはや人宇治川波を清みかも旅行く人の立ちがてにする 橋 14

ちはや人うちわたりにさほどりにはやけむ人しわがもこにせ

む 浮 41

ち早ぶるうちの橋守なれをしぞ哀とは思ふ年のへぬれば 総 43

ちはやぶる金の御崎を過ぎぬともわれは忘れじしかのすめ神

玉 9 ①

ちはやぶる神がき山のさかき葉は時雨に色も変らざりけり 賢

7 ①・8 ④

ちはやぶる かみな月とや けさよりは 曇りもあへず うち

しぐれ もみちとともに ふるさとの よし野の山の 山あ

らしも 寒く日ごとに なりゆけば 玉の緒とけて こきち

らし あられ乱れて しもこほり いや固まれる 庭のおも

に むら／＼みゆる ふゆぐさの 上にふりしく しらゆき

の つもり積りて あらたまの 年をあまたも すぐしつる

かな 野 6 ①

千早ぶる神のい垣にはふ葛も秋にはあへず移ろひにけり 菜下

10

ちはやぶる神の斎垣もこえぬべし今はわが身の惜しけくもなし

賢 8 ①・12

ちはやぶる神のい垣も越えぬべし大宮人の見まくほしさに 賢

8 ②・朝 10

ちはやぶる神のい垣もこゆる身はくさのとざしに障るものかは

若 54 ①・賢 8 ③

千早ぶる神も耳こそなれぬらしさまざ祈るとしもへぬれば

真 6・総 79 ②

千早振る平野の松の枝繁み千代も八千代も色はかはらじ 菜下

12 ①・句 14 ②

勅なればいともかしこし鶯の宿はととはゞいかゞ答へむ 桐 7

②

千代へむと契りおきてし姫松のねざしとめてや宿は忘れじ 松

23

散りぬとも影をやとめむ藤の花池の心のあるかひもなし 桐 66
ちりひちのよゝのみかずにありへてぞ思ひあつむることもおほ
かる 御 3

塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしよりいもとわがぬる床夏の花
帚 19・65 ①・賀 13・葵 54・菜上 4

ちるとみてあるべき物を梅の花うたて匂ひの袖にとまれる 桐

58

散ればこそいとと桜はめでたけれ浮き世に何か久しかるべき

菜下 46 ②・匂 2 ①

つ

月草に衣はすらむあき露にぬれての後はうつろひぬとも 野 20

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして 霧

80・早 15・手 34

月読みの光にきませあしひきの山かさなりて遠からなくに 橋

9

筑紫なる金の御崎に波たてば人のつらさぞ思ひしらるゝ 玉 9

②

つくぐゝと落つる涙はいづみなる信濃太のもりにおとざりけ

り 菜上 48 ②

筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君がみかげにます蔭はなし

夕 7 ①・賢 43・明 20

筑波ねの峯より落つるみな川の恋ぞ積りて淵となりける 関 1

①

筑波山は山しげ山繁けれど思ひ入るにはさはらざりけり 常

18・東 1・9

つくま江に生るみくりの水早みまだねも見ぬに人のこひしき

玉 32 ②・胡 25 ②

堤をば豊浦の宮につきそめてよゝをへぬれど水はもらさず 宿

3 ②

常ならぬ身を秋ぬれば白雲に飛ぶ鳥さへぞかりと音を鳴く 椎

30 ④

つねよりも物思ふ人のまさるかなうべもいひけり秋の夕暮 葵

44 ①・横 7 ②

津の国の長らへゆかば忘れられで猶もみまくの堀江なるらん 澤

16 ②

津の国のなには思はず山城のとはにあひみん事をのみこそ 蘭

12 ⑧

津の国の難波の浦の一つ橋君をしもへばあからめせず 手 23

つばいちの八十のちまたに立ちならし結びし紐を解かまく惜し

も 玉 22 ②

つはもののはらに宿るはつらけれどかたはに見えぬ乙筋なりけ

り 帚 8 ②

遂に行く道とは兼て聞きしかど昨日けふとは思はざりしを 柏

25・椎 17・31

罪とがはしなどの風にまかせたりさすらへぬらん大海の原に

朝 6

罪もなき人をうけへば忘れ草おのが上にぞ生ふと言ふなる 賀

6・真22①・葉上20

露だにもなだゝる宿の菊ならば花の主やいくよなるらむ 野4

②・藤26②

露ながら折りてかざゝむ菊の花おいせぬ秋の久しかるべく 菜

上22②・句11①

つゆならぬ心を花におきそめて風吹くごとに物思ひぞつく 花

2・賢40②・松3

露は置けど我がをる宿の萩がえはかくこそ秋を知らず顔なれ

総27

露をなどあだなるものと思ひけむ我が身も草もおかぬばかりを

霧49②

つらからぬ中にあるこそうれしけれへだて果てゝし衣にやはあ

らぬ 少12①

つらからん人のためにはつらからんつらきはつらき物と知らせ

ん 薄27①

つらき人忘れなむとて歎ふればみそぐかひなく恋こそまされ

朝7③

つるばみの袷の衣裏にせば吾強ひめやも君が来まさぬ 藤35④

つるばみの衣は人皆事無しといひし時より着欲しく思はゆ 藤

35①

つるばみの解濯衣のあやしくも殊に着欲しきこの夕かも 藤

35③

つるばみの一重衣のうらもなくあるらむ児ゆる恋ひ渡るかも

明47③・藤35②

つれづれと空ぞみらるゝ思ふ人あまくだりこん物ならなくに

葉上19

つれづれのながめにまさる涙川袖のみぬれて逢ふよしもなし

葵10①・13②・浮38②

つれなきを思ひわびては唐衣返すにつけてうらみつるかな 玉

40②

つれもなき人に負けじとせしほどに我もあだ名は立ちぞしにけ

る 夕18

つれもなき人を恋ふとて山彦の答へするまで歎きつるかな 夕

40②・手1

て

手に結ぶ水に宿れる月影のあるかなきかの世にこそありけれ

横25・桜11

照りもせず曇りもはてぬ春の夜の臘月夜にしくものぞなき 花

4

手をさへて吉野の滝はせきつとも人の心をいかゞと頼まむ 蘭

10①

手を折りて逢ひ見しことを数ふれば十といひつゝ四つはへにけ

り 帚41・橘30

と

ときかけつ衣の玉は住吉の神さびにけるまつのことゑに 朝3
時ごとに いや珍らしく 八千種に 草木花咲き 鳴く鳥の

声も変らふ 耳に聞き 眼に見るごとに うち歎き 萎へう
らぶれ しひつつ ありける間に 木の晩の 四月し立て
ば 夜隠りに 鳴く霍公鳥 古ゆ 語り継ぎつる 鶯の 現

し真子かも 菖蒲 花橘を 少女らが 珠貫くまでに 茜さ
す 昼はしめらに あしひきの 八峰飛び越え ぬばたまの
夜はすがらに 暁の 月に向ひて 行き還り 鳴き響むれど
いかに飽き足らむ 明57④

時しもあれ秋しも人の別るればいとゞ袂ぞ露けかりける 葵35

②

時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに恋しきものを

葵35①・賢11②

ときはなる松にし心なれきなばかはらぬ色もいまはたのまん

賢7②

とこしへに夏冬行けやはかほろもあふきはなはず山に住む人

末23③

床夏の花をだにみばことなしにすぐす月日も短かゝりなむ 須

13③

とこよなる鳥の声にぞ岩戸とぢひかりなきよはあけはじめける

須51⑤

常世べに 雲たちわたる 水の江の 浦嶋の子が 言持ちわた
る 大和べに 風吹きあげて 雲放れ 退き居りともよ 吾
を忘らすな 霧67②

年毎に逢ふとはすれどたなばたのぬる夜の数ぞ少なかりける

東4①

年ごとにきつゝ声する時鳥はな橘やつまとなるらむ 散10

年月の行方も知らぬ山がつはたきの音にや春をしるらむ 菜上

27

年月は我が身にそへて過ぎぬれと思ふ心のゆかずもあるかな

桐62

とし月も衣も中には多くとも心ばかりはへだてざらなむ 少12

③

年において一夜妹に逢ふひこほしも我にまさりて思ふらめやも

絵50①

年の内にあひてもあはぬ歎きせし人のうへこそ我が身なりけれ

東25②

年ふれど忘れ果てぬ人の世は心止めてぞ猶聞かれける 帚82

年ふれば朽ちこそまされ橘柱昔ながらの名だに姿はらで 賀22

④・玉18⑤

年ふれば越の白山老いにけりおほくの冬のゆき積りつゝ 蓬22

②

年ふれば齢は老いぬ然はあれど花をし見れば物思ひもなし 幻

15

年ふれば我が黒髪も白川のみづはぐむまで老いにけるかな 夕

49

年経ぬる竹の齡は返してもこの世を長くなさむとぞ思ふ 横 1

④

年をへてなれる中をば唐衣うらみてかへす哀なりけり 賢 27 ③
年をへて花の鏡となる水はちりかゝるをや曇るといふらん 初

8 ①

年をへて花の便りにこととはゞいとゞあだなる名をや立ちなむ
幻 3 ①

年を経て響の灘に沈む舟波のよするを待にぞ有りける 玉 18 ③
年を経て行き逢坂の験ありて千年の影をせきもとめなむ 御 5

②

とつ国は水草きよみことしげき都のうちはすまずまされる 菜

上 65

とゞめ置きて誰をあはれと思ふらむ子はまさるらむ子はまさり
けり 葵 42

とにかくに人めつゝみをせきかねて下に流るゝ音無しの滝 行

1 ①

とにかくにものは思はずひだたくみ打つ墨繩の唯一筋に 柏

41・東 33

とはるゝもあだにはあれどこの春は花のたよりぞうれしかりけ
る 幻 3 ②

問ひ見ばやあまのまし人くさゝくにをさせる罪はありやなしや

と 須 68 ②

鳥総立て足柄山に船木伐り樹に伐り行きつあたら船材を 玉 24

飛鳥の 明日香の河の 上つ瀬に 生ふる玉藻は 下つ瀬に
流れ触らばふ 玉藻なす か寄りかく寄り 靡合ひし 婦の
命の たたなづく 柔膚すらを 劔刀 身に副へ寝ねば ぬ
ばたまの 夜床も荒るらむ そ故に 慰めかねて けだし
くも 逢ふやと思ひて 玉垂れの 越智の大野の 朝露に
玉裳はひづち 夕霧に 衣は沾れて 草枕 旅宿かもする
逢はぬ君ゆゑ 霧 5 ①

とぶ鳥の声もきこえぬおく山のふかき心を人は知らなむ 菜上

70・幻 12・総 14・東 17

訪ふ人もなき宿なれどくる春は八重むぐらにもさはらざりけり
桐 31 ①・須 42 ②

遠くありて雲居に見ゆる妹が家に早く至らむ歩め黒駒 明 39 ③

燈のかげにかがよふうつせみの妹が咲しおもかげに見ゆ 帚

17

とやの野に兎ねらはりをささも寝なへ児故に母にころばえ
帚 5

取り返すものにもがなや箱鳥のあけて悔しき物をこそ思へ 賢

42 ③・菜上 16 ③

とり返すものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思は
む 帚 85・空 13・賢 42 ①・少 25・柏 24・30・霧 76 ①・竹 1・

総 58・78・早 31・34・宿 37・夢 4

鶏が鳴く東を指してふさへしに行かむと思へど由もさねなし
花 12

鳥が音の きこゆる海に 高山を 障になして 沖つ藻を 枕

になし 蛾羽の 衣だに着ずに 鯨魚取り 海の浜辺に う

鳥が音の きこゆる海に 高山を 障になして 沖つ藻を 枕

になし 蛾羽の 衣だに着ずに 鯨魚取り 海の浜辺に う

らもなく 宿れる人は 母父^{おもちち}に 愛子^{あいこ}にかあらむ 若草の
妻かありけむ おもほしき 言伝てむやと 家問へば 家
をも告らず 名を問へど 名だにも告らず 泣く児^{なな}如す 言
だに問はず 思へども 悲しきものは 世間^よにあり 世間に
あり 明47⑤
鳥の子はまだひなながら立ちていぬかひのみゆるは巢守なりけ
り 橋6③
鳥部山谷に煙のもえたつははかなく見えし我と知らなむ 夕52
②・53・須7①

な

中川に洗ふ根芹のねを掘りてあらはれてこそあるべかりけれ
帚76

長からぬ命のほどに忘るゝはいかにみじかき心なるらむ 桐29
ながしとてあけずやあらむ秋のよはまてかしまきのとばかりを
だに 絵3

ながしとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば 明
44①・絵23・宿21・東34

中空に立ちある雲の跡もなく身のはかなくもなりにけるかな
菜上57

なかぞらにゆきもやられずおぼつかかな霞晴れせぬしかのやまこ
え 浮31

長月の有明の月のありつゝも君しきまさはわれ恋めやも 葵18

中々にいひははなたで信濃なる木曾路の橋のかけたるやなぞ

胡19

なか／＼に思ひかけては唐衣身になれぬをぞうらむべらなる

行16

なかなかに君に恋ひずは比良の浦の白水郎^{ふく}ならましを玉藻刈り

つつ 梅13

ながめつつ我が思ふことはひぐらしに軒の雪のたゆるよもなし

螢4②・真31⑥

眺めやる山辺はいとゞ霞みつゝ覺束なさのまさる春かな 鈴12

長らへむ命もしらぬ忘れじと思ふ心は身にそはりつゝ 初31

流れてはいもせの山の中に落つる吉野の川のよしや世の中 賀

34①・蘭12⑩

流れ行く末せきとむる玉水のこぼれもあへず落つる涙か 真33

②

流れ行く我はみくづとなりはてぬ君しがらみとなりてとどめよ

手4①

なき事を磬余の池の浮きぬなは苦しき物はよにこそ有りけれ

末34

なき名ぞと人にはいひてありぬべし心のとほゞいかゞ答へむ

菜上46・霧19

なき人の書き留めけむ水茎は打ち見るよりぞ流れそめける 梅

14①

なき人のかげだに見えぬ遣水のそこに涙を流してぞこし 桐

60・藤29・霧60

なき人の巢守にだにもなるべきに今はと帰る今日の悲しき 橋

6 ①

なき人の宿に通はゞ郭公かけてねにのみなくとつげなむ 幻 31

①・蜻 11

なき人は訪れもせで琴の緒をたちし月日ぞ帰りにける 横 11

なき渡る雁の涙やおちつらむもの思ふやどの萩の上の露 柏 48

鳴く声はまだ聞かねども蟬の羽の薄き衣はたちぞきてける 夕

70 ②

なく涙ふりにし年の衣手は新らしきにもかはらざりけり 葵 64

②

なくなればなげのあはれもいはるゝをさは心みにあくがれぬ魂

葵 19 ④

歎きこる人いる山の斧の柄のほとくしくも成りにけるかな

藤 12 ①

歎きこる山とし高く成りぬればつら杖のみぞまづつかれける

帚 36 ①・葵 40 ②・滝 23・菜上 32

名児なごの海の朝明あきのなごり今日もかも磯の浦廻うらまに乱れてあらむ

明 9

夏かりのみづましたえの腰にをへるみをやなぐひのやさしとぞ

思ふ 宿 72

夏刈りの萩の古枝も萌えにけり群居し鳥も空にや有らむ 松 36

⑤

夏草もよの間は露にいこふらむ常にこがるゝ我ぞ悲しき 菜下

56 ②

夏葛の絶えぬ使のよどめれば事しもあるごとと思ひつるかも 東

24

夏くればこりすまに生ふる大荒木の森の下草かひもあらなくに

賀 16 ②・17 ③

夏衣うすきながらぞ頼まるゝ一重なるしも身に近ければ 手 24

夏なれど山はさむしといふなればこの皮衣かわぎは風をふせがん 末

23 ①

夏にこそ咲きかかりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな 藤

6・菜下 21

夏なれど夏ともしらですぐるかな月のかつらのかげにかくれて

蘭 11

夏なれば宿にふすぶるかやり火のいつまで我が身下もえにせむ

薔 2

夏の月光をまして照る時は流るゝみづにかげろふぞ立つ 蜻 36

③

夏の日も朝夕涼みあるものをなどわが恋のひまなかるらむ 菜

下 56 ①

夏の夜は浦島の子が箱なれやはかなく明けて悔しかるらむ 霧

67 ①

夏ばかり初立はつたちするなる郭公果にはかへらぬ年もあらじな 葵 22 ①

夏虫のみをいたづらになす事も一つ思ひによりてなりけり 菜

下 37・柏 4

夏虫をなにかいひけむ心からわれも思ひにもえぬべらなり 胡

12 ②

などてかく逢ふごかたみになりにつむ水もらさじと結びしものを 藤19・宿3 ①

① 何かこのほどなき袖を濡らすらむ霞の衣なべてきる世に 浮12

なにごとと知らぬ人にはゆふだすきなにかただすの神にかくらん 幻25 ③

名にし負はゞいざこととはむ都鳥我が思ふ人はありやなしやと手5

名にしおへば八重山吹ぞ憂かりける隔てゝ折れる君によそへて胡16

何せむに命をかけて誓ひけむいかばやと思ふ折もありけり桐15 ②

何せむに玉の台も八重葎はへらむ中に二人こそねめ 夕4 ①

何せむにへだのみるめを思ひけむ沖つ玉もを潜く身にして明31 ②・行18・宿28

何にきく色そめかへし句ふらむ花もてはやす君もこなくに幻2

難波潟こげども小舟は葎わかのでさる程こそ久しかりけれ若49 ②

① なにに漏しは満ちくらしあま衣田蓑の島にたづなき渡る 澤18

難波潟 潮満ちくれば 海人衣(本) 海人衣 田蓑の島に 鶴立ちわたる(本) 澤18 ②

難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べとさくやこの花 若36

難波津に御船泊てぬと聞こえ来ば紐解き放けて立ち走りせむ

行21

名にめでゝ折れるばかりぞ女郎花われおちにきと人に語るな句9 ①

なにわぎを我はしつゝかあまてるやひるめの神をしはしとゞめん 桐55 ①

何をして身のいたづらに老いぬらむ年の思はむ事ぞやさしき桐36 ②・真5 ②・霧16 ①・宿57・蜻6

なびく方ありける物をなよ竹のよにへぬ物と思ひけるかな胡20 ①

なほき木に曲れる枝もあるものを毛をふききずを言ふがわりなさ 桐8・帚16・賀8

なほ頼めしめちが原のさしも草われ世の中にあらむ限りは夕55

波立たば沖の玉藻もよりくべく思ふ方より風も吹かなむ 須47

涙川おつる水上はやければせきぞかねつる袖のしがらみ 幻7 ②・手4 ②

なみだ川底のもくつとなりはてゝ恋しきせゞに流れこそすれ早21

① 涙川ながす寝覚もあるものを払ふばかりのつゆや何なり 葉下40 ③

② 涙川流れて袖のこほりつゝさよふけゆけば身のみひゆらん 真14

涙川枕ながるゝうきねには夢も定かに見えずぞありける 須46

①・柏5①

涙川みづまさればやしきたへの枕のうきて止まらざるらむ 須

46③・宿17②

涙にも思ひのきゆる物ならばいとかく胸は焦がさぐらまし 帚

69③

波にのみぬれつるものを吹く風のたよりうれしきあまの釣舟

明13

波の音のけさからことに聞こゆるは春の調べやあらたまるらむ

胡10

波の花おきからさきてちりくめり水の春とは風やなすらん 胡

6①

波分けてみる由もがな渡つみの底のみるめも紅葉散るやと 若

9②

なよ竹に枝さしかはすしのすゝき夜ませに見えむ君は頼まし

松36④

なよ竹のよながきうへに初霜のおきゐて物を思ふ頃かな 帚84

①・野18

なよ竹のわがこの世をば知らずしておほし立てつと思ひけるか

な蓬2②

楢の葉の葉守の神のましけるを知らでぞ折りしたたりなさるな

柏50②

習はねば人の問はぬもつらからで悔しきにこそ袖は濡れけれ

宿38①

奈良山の児の手柏の両面にかにもかくにも候人の徒 帚23

鳴り高しや 鳴り高し 大宮近くて 鳴り高し あはれの 鳴

り高し 音なせそや 密かなれ 大宮近くて 鳴り高し あ

はれの 鳴り高し あな喧 子供や 密かなれ 大宮近くて

鳴り高し あはれの 鳴り高し 帚75②・少4

なれ行くは浮き世なればや須磨のあまの塩やき衣まどほなるら

む 朝12①

汝をと吾を人そ離くなるいで吾君人の中言聞きこそなゆめ 菜

上18①

に

にくからぬ人のきせけむ濡れ衣は思ひにあへず今乾きなむ 賀

23・霧18②

にくさのみ益田の池のねぬなはいとふにはゆる物にぞありけ

る 夕62②・常30①・早14②・18①・手28

西京なる御達は 綾千足 繰りあげて 居るかとし

のびきするや ぬのびきするや 蟋蟀の 何と姦むかし 荻

の花や 帚30

には鳥のおきなが河はたえぬとも君に語らふことつきめやは

夕35

句はねどほゝゑむ梅の花をこそ我もをかしと折りて詠むれ 末

35①・41・常22・菜下61

句ふかの君思ほゆる花なれば別れしつべく袖ぞ濡れぬる 句5

②・6②

ぬ

貫河の瀬々の やはら手枕 やはらかに ぬる夜はなくて 親

離くる夫 親離くる夫は ましてゐるはし しかさらば 矢矧

の市に 沓買ひにかむ 沓買はば 線鞋の 細底を買へ さ

し履きて 表袋とり着て 宮路かよはん 花8・常12

主しらぬ香こそ匂へれ秋の野にたがぬぎかけし藤袴ぞも 匂5

③・7・橋23

盗人の立田の山に入りけり同じかざしの名にやけがれむ 胡

14 ②・常7 ②

ぬば玉の闇のうつつは定かなる夢にいくらもまさざりけり

桐28・明43 ①・菜下43

ぬば玉の夜霧の立ちておほほしく照れる月夜^{つよ}の見れば悲しさ

霧14

ぬばたまの夜んべはかへる今宵さへ我をかへすな宇治のたまひ

め 橋34 ②

ぬれつゝぞ強て折りつる年の内に春はいく日もあらじと思へば

初6

ね

ねぎ言をさのみ聞きけむ社こそ果ては歎きの森となるらめ 胡

18・常21・菜下54

寝くたれの朝顔のはな秋きりにおもかくしつゝ見えぬきみかな

藤17

ねになきてひぢにしかども春雨に濡れにし袖と問はゞ答へむ

桐24 ②

ねぬなほの苦しかるらんひとよりも我ぞ益田のいけるかひなき

夕62 ①・霧26

ねぬるよのかべ騒がしく見えしかど我ちがふれば事なかりけり

浮7 ①

ねぬる夜の夢さわがしくみえつるはあふに命をかへやしつらん

浮7 ②

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさる

かな 帚92・明12・浮55

の

残りなくちるぞめでたき桜花ありて世の中はてのうければ 菜

下46 ①・匂2 ②

後瀬山後も逢はむと思へこそ死ぬべきものを今日までも生けれ

帚86 ②・総24 ②

野べみれば若なつみけりむべしこそ垣ねの草も春めきにけり

初2